

2000年2月29日

埼玉昆虫談話会

表紙の昆虫

● オギの隙間にひそむクロモンヒラナガゴミムシ

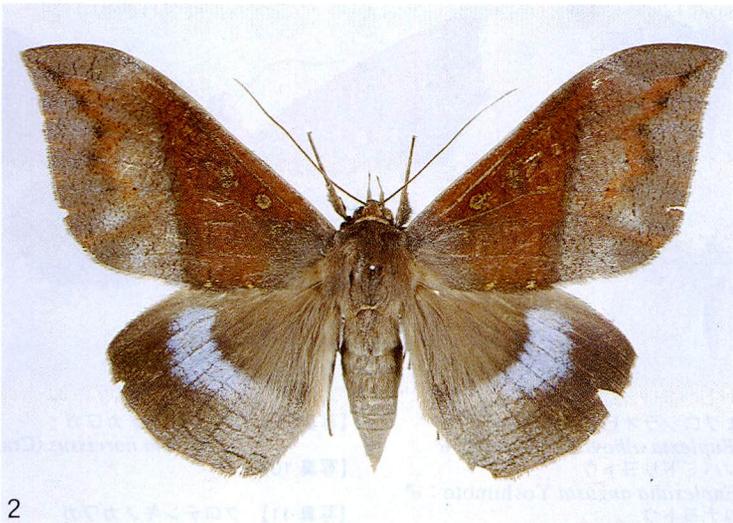
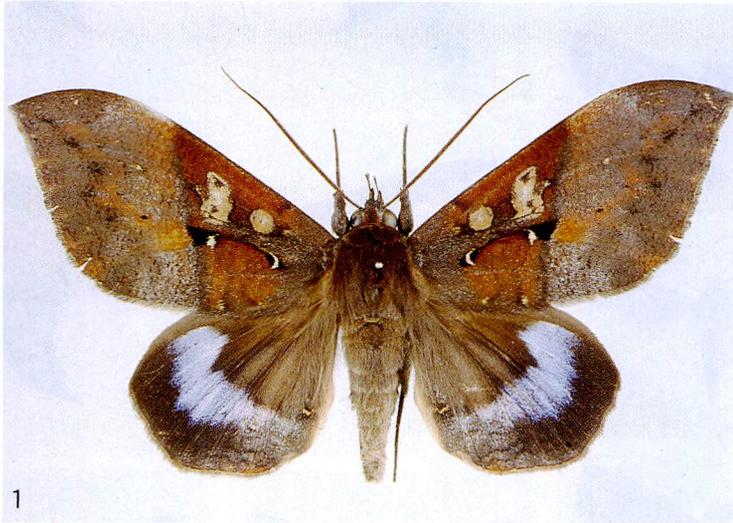
1970年代に調査された埼玉県動物誌を見ると、浦和市の田島ヶ原から珍品のクロモンヒラナガゴミムシが記録されています。はたして現在でも生息しているものなのだろうか、この地をたずねてみました。この種はスキヤオギの葉の隙間に生息しているので、水路の脇に生えているオギを早速覗きこんでみます。いましました。すぐに10匹近くのクロモンヒラナガゴミムシと出会うことが出来ました。田島ヶ原は荒川の昆虫相の凄さを垣間見ることが出来る数少ない場所のひとつです。

イラスト・文：豊田 浩二

表紙デザイン：小堀 文彦

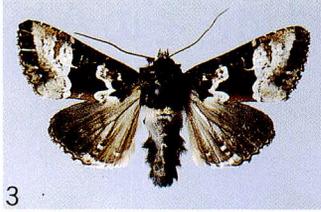
10月の両神山で得た偶産性ヤガ科蛾類とその背景

神部 正博・築比地 秀夫・長畑 直和



【写真 1】 オオルリオビクチバ *Ischyja manlia* (Cramer) :♂

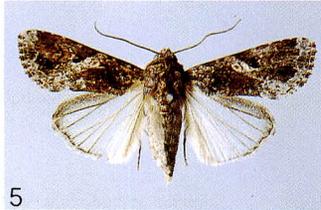
【写真 2】 ♀ :♂



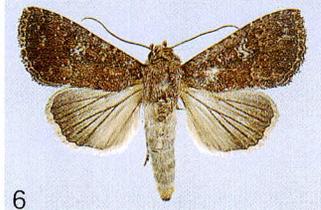
3



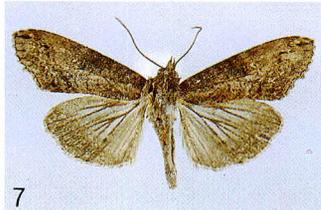
4



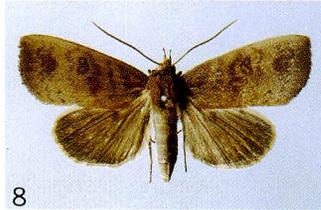
5



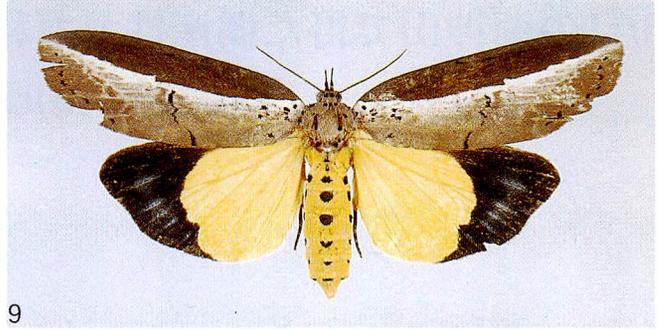
6



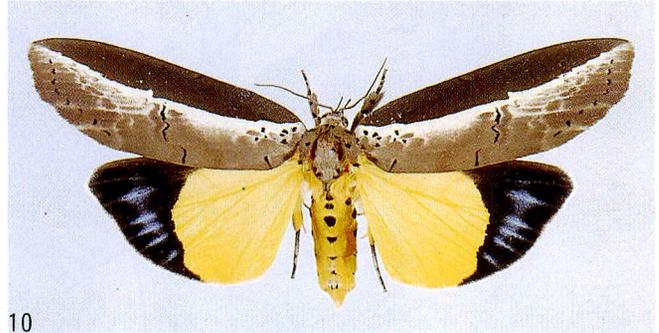
7



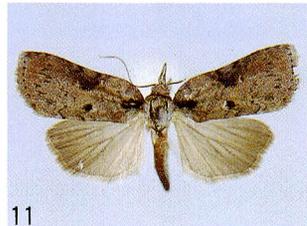
8



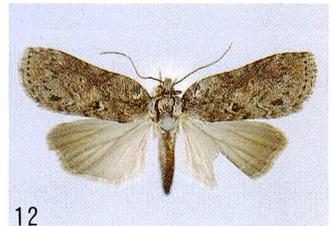
9



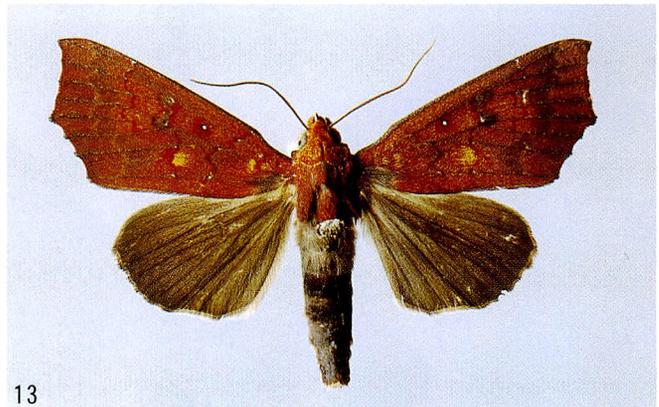
10



11



12



13

【写真 3】 マエグロシラオビアカガネヨトウ
Euplexia albovittata Moore : ♂

【写真 4】 ホソバミドリヨトウ
Euplexidia angusta Yoshimoto : ♂

【写真 5】 シロナヨトウ
Spodoptera mauritia (Boisduval) : ♀

【写真 6】 オオホシミミヨトウ
Platysenta illecta (Walker) : ♂

【写真 7】 ヤマトホソガ
Lophoptera hayesi Sugi : ♂

【写真 8】 オオトウウスグロクチバ
Avitta fusciosa Moore : ♀

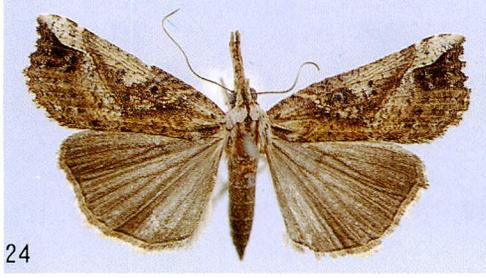
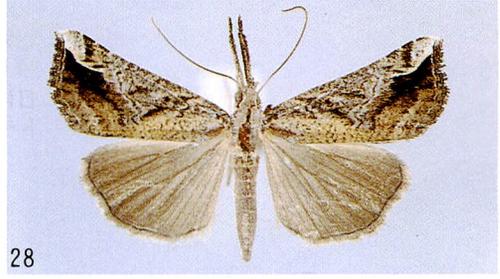
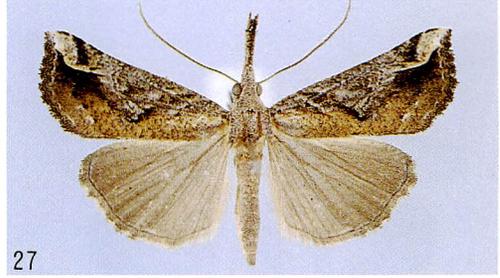
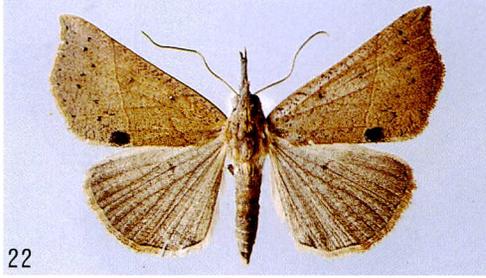
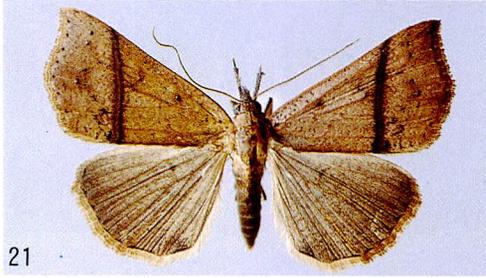
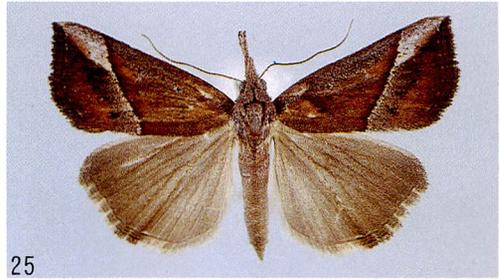
【写真 9】 シンジュキノカワガ
Eligma narcissus (Cramer) : ♀

【写真 10】 " : ♀

【写真 11】 クロテンキノカワガ
Nyctera dufayi Sugi : ♀

【写真 12】 " : ♀

【写真 13】 ムラサキオオアカリバ
Anomis longipennis Sugi : ♂



【写真 20】 タケアツバ
Rivula leucanioides (Walker) : ♂
 【写真 21】 ナミテンアツバ
Hypena strigatus (Fabricius) : ♂
 【写真 22】 ♀
 オオトビモンアツバ
Hypena occata Moore : ♂
 【写真 23】 オスグロホソアツバ
Hypena lignevalis Walker : ♀

【写真 25】 アオアツバ
Hypena subcyanea Butler : ♂
 【写真 26】 ♀
 【写真 27】 コテングアツバ
Hypena pulverulenta Wileman : ♂
 【写真 28】 ♀
 【写真 29】 ハナトガリアツバ
Hypena sp. 2 (学名未定種) : ♂

はじめに

両神山(りょうかみさん)は埼玉県秩父郡両神村の北西端に位置する。この山頂北部は同郡小鹿野町(おがのまち)で、群馬県多野郡中里村(たのぐんなかざとむら)と北西部の同郡上野村(うえのむら)も接近する。また、南西部は埼玉県秩父郡大滝村(ちちぶぐんおおたきむら)である。

この両神山山頂から北へ、そして西へ延びる稜線直下を貫く林道金山志賀坂線の八丁(はっちょう)トンネル北側で偶産蛾に遭遇した。この記録地はすべて同一地点で、行政区画は小鹿野町である。今回の報文は、1999年10月に上述の「八丁トンネル北」から得たヤガ科に属する偶産蛾を軸に報告する。

偶産蛾の飛来要因の解析は、気象との関係からなされている。直接的な因果関係を探る手段として、重要である。しかし、筆者らは偶産蛾が得られた背景として、ともに得られたいわゆる普通種と呼ばれる種、地形・標高等の特色を示す。

最初に注目すべき種類として、萩原・利根川・築比地・矢野・氷室(1998)埼玉県昆虫誌Ⅰ(第2分冊)から埼玉県未記録の10種と記録の少ない12種を、カラー写真とともに示す。(築比地秀夫撮影)なお、以下の記録に添えた写真番号は標本写真の番号と対応する。よって標本写真の記録は本文の写真番号の位置からわかる。

次に、いわゆる普通種を『埼玉県の普通種』としてゆるやかながら定義することを試みた。そうして、「八丁トンネル北」から得たヤガ科蛾類の『埼玉県の普通種』を示す。そして「八丁トンネル北」との共通種として、1999年は「八丁トンネル南」と「三国峠(みくにとうげ)」でも蛾類調査を実施しており、それらの地域から得られた記録を示す。なお、「八丁トンネル南」とは林道金山志賀坂線の八丁トンネルの南側である。また、「八丁トンネル南」と「三国峠」とした調査地は埼玉県秩父郡大滝村である。詳しくは後述する。

調査方法

「八丁トンネル北」：主に仮設の土木工事用投光機(400W-裸球のレフ水銀灯)を利用。

調査は日没から翌朝まで断続的に行った。

ただし、10月15日はライトトラップを併用し、調査時間は未明の午前1時から朝まで。10月17日は日没から午前0時頃まで。

「八丁トンネル南」と「三国峠」：ライトトラップを2組用意。使用した光源を次に示す。

神部) 23W-電球型白色蛍光灯3個, 20W-白色蛍光灯3本, 20W-ケミカルライト1本, 30W-ケミカルライト1本, 20W-ブラックライト1本。

築比地) 200W-裸電球1個, 23W-電球型白色蛍光灯2個, 20W-ブラックライト2本。

調査時間は日没から翌朝までの終夜。

「八丁トンネル北」の特徴は、水銀灯が24時間点燈していたこと。その点燈期間では1999年5月3日に訪ねたとき、すでに点燈していた。その後、同年8月14日まで連続点燈していたと思われる。この14日は、関東地方で集中豪雨が起り、神奈川県山北町の西丹沢で起った水難事故が記憶に残る。このとき、大滝村でも道路や斜面崩壊が多発した。この集中豪雨によって停電したと思われる。これは同年9月5日に訪れた際、送電線が寸断されていたため。

なお、8月14日以前の水銀灯の設置場所は、道路の谷側だった。このため、蛾の飛来個体は道路の下の急傾斜地に集まり、採集効率が悪かった。

その後、10月3日に訪れた。このとき、路肩の崩壊により谷側にあった水銀灯は、山側の駐車場の隅に移設されて、点燈していた。そこでは前夜までに飛来した蛾の死骸がめだつた。築比地はそのなかからムアキシタクチバ(死骸)を発見した。

「八丁トンネル北」に設置された光源に比べると、「八丁トンネル南」、「三国峠」で用いたライトトラップとでは光源の違いから比較しにくい。その点燈時間も「八丁トンネル北」では連日・連続点燈なのに対し、筆者らは持参の装置で調査時間中だけである。

1: 「八丁トンネル北」から得た偶産性ヤガ科蛾類《種名の右の*は埼玉県初記録を示す》

以下に示すとおり、種類構成では多様である。しかし、最も多くの個体がみられた種はムーアキシタクチバであった。ホソバミドリヨトウの個体数はムーアキシタクチバの1/5から1/10程度で、10から30個体程度であった。ただし、飛来個体数のカウントはしてはならず、「およそ」の数値である。

一夜限りの採集となった種はシロナヨトウ、ヤマトホソヤガ、クロテンキノカワガ、クロモンシタバ、ツキワクチバ、ムラサキオオアカキリバ、(ヘリボシキシタクチバ)、オトウウスグロクチバ、タケアツバ、ナミテンアツバ、アオアツバ、ハナトガリアツバの12種。これらほとんどの種で、1ないし2個体程度しか得られなかった。ただし、ヘリボシキシタクチバは未発見個体がないとはいえない。また、やや多めの個体数が得られた種はツキワクチバであった。しかし、大型で目立つ種であるにもかかわらず、一夜限りであった。この次にやや多めに得られた種はナミテンアツバの4個体にすぎない。

二度の採集機会があった種はマエグロシラオビアカガネヨトウ、オオホシミヨトウ、シンジュキノカワガ、オオルリオビクチバ、オオトビモンアツバ、オスグロホソアツバ、コテングアツバの7種。これらもほとんどの種で1ないし2個体ずつしか得られなかった。唯一、オスグロホソアツバで3個体を得た程度であった。

カラスヨトウ亜科 Amphipyrinae

- (3812) マエグロシラオビアカガネヨトウ *Euplexia albovittata* Moore *
 3-4 Oct.1999 1♂神部:【写真3】 10-11 Oct.1999 1♂築比地(汚損個体)
- (3818) ホソバミドリヨトウ *Euplexidia angusta* Yoshimoto
 10-11 Oct.1999 1♂築比地, 1♂長畑, 1♀神部
 15 Oct.1999 1♂神部:【写真4】 記録個体は 飛来個体の一部。
- (3841) シロナヨトウ *Spodoptera mauritia* (Boisduval)
 10-11 Oct.1999 1♀築比地:【写真5】
- (3923) オオホシミヨトウ *Platysenta illecta* (Walker) *
 10-11 Oct.1999 1♂築比地
 15 Oct.1999 2♂神部:【写真6】 「三国峠」からも得られ、別に記す。

ホソヤガ亜科 Stictopterinae

- (3965) ヤマトホソヤガ *Lophoptera hayesi* Sugi *
 15 Oct.1999 1♂神部:【写真7】 「三国峠」からも得られ、別に記す。

キノカワガ亜科 Sarrothripinae

- (3971) シンジュキノカワガ *Eligma narcissus* (Cramer)
 10-11 Oct.1999 1♀築比地:【写真9】 15 Oct.1999 1♀神部:【写真10】
 10月17日は 意識的に探したが 未発見。
- (3980) クロテンキノカワガ *Nycteora dufayi* Sugi *
 10-11 Oct.1999 2♀神部:【写真11】・【写真12】

シタバガ亜科 Catocalinae

- (4202) クロモンシタバ *Ophiusa tirhaca* (Cramer)
 10-11 Oct.1999 1♀神部:【写真14】
- (4240) ツキワクチバ *Artena dotata* (Fabricius)
 15 Oct.1999 3♂・2♀神部:【写真15:♀】

クチバ亜科 Ophiderinae

(4265) ムラサキオオアカキリバ *Anomis longipennis* Sugi * →考察-3:まとめ-d)を参照。
15 Oct.1999 1♂神部:【写真13】

「八丁トンネル南」と「三国峠」からも得られ、別に記す。

(4285) ムーアキシタクチバ *Hypocala deflorata* (Fabricius)
3-4 Oct.1999 1♂(死亡個体の確認)築比地 17 Oct.1999 3♂・3♀長畑
10-11 Oct.1999 5♂築比地,1♂・1♀神部,1♂長畑
15 Oct.1999 5♂・5♀神部:【写真16:♀】 記録個体は飛来個体の一部。

(4286) ヘリボシキシタクチバ *Hypocala violacea* Butler *
15 Oct.1999 1♂神部:【写真17】
この記録は10月15日になって初めて、本種の得られる可能性を考えながら探し出した。

(4279) ヒメアケビコノハ *Othreis fullonia* (Clerck)
10-11 Oct.1999 1♀築比地 17 Oct.1999 2♂・4♀長畑:【写真18:♂】
15 Oct.1999 2♀神部:【写真19】
記録は飛来個体の一部。10月2-3日は未発見。10月10-11日に初めて発見。なお、10月10-11日と10月15日は多数の飛来個体をみた。10月17日は発見個体をすべて採集。

(4288) オオルリオビクチバ *Ischyja manlia* (Cramer) *
10-11 Oct.1999 1♂長畑:【写真1】
15 Oct.1999 1♂神部:【写真2】 10月17日は意識的に探したが未発見。

(4323) オトウウスグロクチバ *Avitta fascuosa* Moore
10-11 Oct.1999 1♂・1♀築比地:【写真8:♀】

(4420) タケアツバ *Rivula leucanioides* (Walker)
10-11 Oct.1999 1♂神部:【写真20】

アツバ亜科 Hypeninae

(4461) ナミテンアツバ *Hypena strigatus* (Fabricius)
15 Oct.1999 2♂・2♀神部:【写真21:♂】・【写真22:♀】

(4465) オトビモンアツバ *Hypena occata* Moore
10-11 Oct.1999 1♂神部 15 Oct.1999 1♂神部:【写真23】

(4470) アオアツバ *Hypena subcyanea* Butler *
15 Oct.1999 2♂神部:【写真25】・【写真26】

(4472) オスグロホソアツバ *Hypena lignalis* Walker *
3-4 Oct.1999 1♀神部:【写真24】 15 Oct.1999 2♀神部

(4476) コテングアツバ *Hypena pulverulenta* Wileman
10-11 Oct.1999 1♂築比地:【写真27】 15 Oct.1999 1♂神部:【写真28】

(---) ハナトガリアツバ *Hypena* sp.2 * (和名は与えられているが、学名は未定)
15 Oct.1999 1♂神部:【写真29】

2: 「八丁トンネル北」から得たヤガ科蛾類のうちの『埼玉県の普通種』

偶産性のヤガ科蛾類が多量に得られた背景として、いわゆる普通種と呼ばれる蛾類も莫大な数の飛来があった。「偶産蛾」といわゆる普通種とは無関係ではなく、その境界では曖昧さを伴う。ここでは「偶産蛾」の定義の議論ではなく、既に示した「偶産蛾」のほかに、偶産蛾としたほうが適切かもしれない種を含め、『埼玉県の普通種』として示す。

そこで、萩原、ほか(1998)埼玉県昆虫誌1(第2分冊)を参考に、埼玉県東部低地から複数記録さ

れた種を、ここでは仮に『埼玉県の普通種』と呼ぶ。当然ながら広域分布種。あるいは、日本列島以南に分布の中心地がある種を、井上ほか(1982)日本産蛾類大図鑑によって確認し、引用した。以上の関係に該当する種を示す。

ただし、(キバラケンモン)・キミヤクヨトウ・ムラサキアシトクチバ・トビモンアツバは例外となる。なぜなら、これらの種は埼玉県では、主に西部の山地から記録され、県東部の平野部である草加市・春日部市・久喜市・戸田市から記録されていない。しかし、4種の国外分布は日本列島以南に広がるため、加えた。このように、①：山地から高率に得られる種、②：平地から山地までの広域から得られる種と区別してもよい。なお、アカフヤガの扱いは微妙で、念のため加えた。

注意) 以下の記録個体数等は飛来個体数や飛来個体の性比率(雄/雌比)を反映していない。

(3403) キバラケンモン *Trichosea champa* (Moore)

15 Oct.1999 1♀神部: *T. ainu* や *T. ludifica* ではなく、*champa* である。

杉・中村(1986)によるキバラケンモンの国内分布は「本州中央部から四国、九州、屋久島に及ぶ。沖縄地方には本属は分布しないと思われる」とされ、南西諸島は含まれていない。

豊富に記された記録地から、四国の記述に注目したい。そこには「高松市のような低地から石鎚山、剣山といった高地まで産する」とある。その理由として、*T. champa* の移動性はどうか。しかも、世界的な分布では「ヒマラヤから中国、台湾、日本の低地域に広く産するいわゆる照葉樹林帯分布型」とされた。照葉樹林帯より寒冷な地域から記録される理由のひとつとして、ここでも「移動性」を考慮するとわかりやすい。

次に埼玉県昆虫誌 I では、*champa* と *ainu* の2種が示されたが、*champa* とされた記録の中に別種が含まれないと断定できない。それでもなお記録地は埼玉県西部の山地に集中しており、県東部低地から記録されていない点は意味深長である。残された標本、未公表の標本を確認したい。

(3474) オオタバコガ *Helicoverpa armigera* (Hübner)

10-11 Oct.1999 1♂神部・1♂築比地

(3519) ニセタマナヤガ *Peridroma saucia* (Hübner)

10-11 Oct.1999 1♂(黒色型)長畑, 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 多数 目撃 神部

(3520) コウスチャヤガ *Diarsia deparca* (Butler)

10-11 Oct.1999 1♂長畑

日本の特産種で、東南アジアに局地性の近縁種を有するという。「成虫には多少の移動性があるように思われるが、明確ではない」とされている。

(3522) オオバコヤガ *Diarsia canescens* (Butler)

3-4 Oct.1999 2♀神部

(3527) アカフヤガ *Diarsia pacifica* Boursin

3-4 Oct.1999 1♀神部 10-11 Oct.1999 1♂長畑

埼玉県東部低地の記録は少ない。川口市と北本市から報告されたことが埼玉県昆虫誌 I からわかる。このほか、平野部の戸田市道満の記録がある。これは萩原・築比地・有山(1996)に記された。

県西部では児玉町-小川町-日高市-入間市より、西で記録されている。「現状では日本特産種」で「北限は東北地方北部、四国、九州、屋久島に産する」という。南西諸島は示されていない。

(3535) シロモンヤガ *Xestia c-nigrum* (Linnaeus)

10-11 Oct.1999 1♂神部

(3569) キミヤクヨトウ *Dictyestra dissecta* (Walker)

10-11 Oct.1999 1♂築比地

埼玉県東部低地の記録はない。県西部では大滝村・小鹿野町・横瀬町・寄居町といった山地から記録されている。国外では「インド、スラウエシ、フィリピン等の山地にひろ

山地から記録されている。国外では「インド、スラウエシ、フィリピン等の山地にひろく分布する」という。

- (3636) アワヨトウ *Mythimna separata* (Walker)
15 Oct.1999 2♀神部
- (3733) チャイロカドモンヨトウ *Apamea sodalis* (Butler)
10-11 Oct.1999 1♂築比地
- (3840) ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* (Fabricius)
10-11 Oct.1999 1♂・2♀築比地, 1♀長畑 15 Oct.1999 多数 目撃 神部
- (3868) カラスヨトウ *Amphipyra livida* Motschulsky
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部
- (3956) フサヤガ *Eutelia geyeri* (Felder & Rogenhofer)
10-11 Oct.1999 1♀築比地 15 Oct.1999 1♀神部
- (3974) キノカワガ *Blenina senex* (Butler)
10-11 Oct.1999 1♂長畑
- (3976) ネスジキノカワガ *Characoma ruficirra* (Hampson)
3-4 Oct.1999 1♀神部 10-11 Oct.1999 2♂神部
- (4131) ギンモンシロウワバ *Macdunnoughia purissima* (Butler)
10-11 Oct.1999 1♂神部
- (4157) キクキンウワバ *Trichoplusia intermixta* (Warren)
10-11 Oct.1999 1♀長畑
- (4162) エゾギクキンウワバ *Ctenoplusia albostrata* (Bremer & Grey)
10-11 Oct.1999 1♀神部 15 Oct.1999 1♀神部
- (4163) ミツモンキンウワバ *Acanthoplusia agnata* (Staudinger)
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 1♂神部
- (4170) ウリキンウワバ *Anadevidia peponis* (Fabricius)
10-11 Oct.1999 1♂築比地
- (4214) ムラサキアシブトクチバ *Dysgonia maturata* (Walker)
10-11 Oct.1999 1♂築比地
埼玉県東部低地の記録はない。県西部では大滝村(栃本・三峰山・三国峠)の3か所が既知である。記録が少なく「普通種」といい難い。ただし、「本土域の山地に産する」とされ、埼玉県の記録と一致する。国内では「本州、四国、九州の本土域の山地と屋久島に産する」とあり、南西諸島は示されていない。また、国外では「インドマレー地域に分布し、中国、台湾、日本などの温帯地域にも進出」という。
- (4215) ホソオビアシブトクチバ *Dysgonia arctotaenia* (Guenée)
17 Oct.1999 1♂長畑
- (4222) オウンモンクチバ *Mocis undata* (Fabricius)
15 Oct.1999 1♂神部
- (4239) ムクゲコノハ *Lagoptera juno* (Dalman)
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 多数 目撃 神部
埼玉県東部の低地や平地からの記録は少ないが、築比地(1996)による浦和市の記録と萩原・築比地・有山(1996)による戸田市道満の記録がある。ただし、後者は埼玉県昆虫誌Iに示されていない。
県西部では 児玉町-小川町-入間市、所沢市から西で記録されている。国外では「*Lagoptera* 属がアジアの特産」で、「インド北部、中国、台湾にわたって大陸部に分布。東アジアの冷温帯にも進出し、沿海州、朝鮮に達する」という。

- (4241) フクラスズメ *Arcte coerulea* Guenée
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部
- (4259) ワタアカキリバ *Anomis flava* (Fabricius)
15 Oct.1999 5♂・1♀ 神部
- (4260) アカキリバ *Anomis mesogona* (Walker)
15 Oct.1999 2♂ 神部
- (4276) アカエグリバ *Oraesia excavata* (Butler)
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 1♂・1♀ 神部
- (4281) アケビコノハ *Adris tyrannus* (Bueivee)
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 多数 目撃 神部
埼玉県東部低地の記録は少ない。「アジア暖温帯に固有の定着種で、(ミドリモンコノハ)のように広域の拡散移動を行なうことはないと思われる」とされている。
- (4300) ハガタクチバ *Daddala lucilla* (Butler)
10-11 Oct.1999 多数 目撃 神部 15 Oct.1999 2♀ 神部
- (4310) ナカジロシタバ *Aedia leucomelas* (Linnaeus)
15 Oct.1999 1♂ 神部
- (4399) マエテンアツバ *Rhesala imparata* Walker
15 Oct.1999 2♂・1♀ 神部
- (4467) トビモンアツバ *Hypena indicatalis* Walker
10-11 Oct.1999 1♂ 神部 15 Oct.1999 2♂ 神部
埼玉県東部低地の記録はない。県西部では、児玉町-小川町-日高市、小鹿野町-大滝村から記録されている。国内では関東地方が北限とされ「温暖地にもっともふつう」で、「インド・台湾・宮古島・沖縄本島・奄美大島・対馬にも産す」という。

3: 「八丁トンネル南」と「三国峠」から得たヤガ科蛾類のうち、「八丁トンネル北」との共通種(偶産蛾・埼玉県の普通種)

- (3474) オオタバコガ *Helicoverpa armigera* (Hübner)
11-12 Sep.1999 三国峠 1♀ 神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♀ 神部
9-10 Oct.1999 三国峠 1♂・1♀ 築比地
- (3519) ニセタマナヤガ *Peridroma saucia* (Hübner)
5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 2♂ 築比地
9-10 Oct.1999 三国峠 1♂(黒色型)・1♂(白色型) 神部, 1♂(黒色型) 築比地
- (3520) コウスチャヤガ *Diarsia deparca* (Butler)
15-16 May 1999 八丁トンネル南 2♂ 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂ 築比地
11-12 Sep.1999 三国峠 1♂ 築比地
- (3527) アカフヤガ *Diarsia pacifica* Boursin
15-16 May 1999 八丁トンネル南 1♂ 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 3♂ 築比地
5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 2♂ 築比地
- (3535) シロモンヤガ *Xestia c-nigrum* (Linnaeus)
5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 2♂ 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂ 築比地, 1♂ 長畑
11-12 Sep.1999 三国峠 1♀ 神部
- (3569) キミヤクヨトウ *Dictyestra dissecta* (Walker)
9-10 Oct.1999 三国峠 3♂ 築比地
- (3636) アワヨトウ *Mythimna separata* (Walker)
3-4 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂ 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂ 神部, 1♂ 築比地

- (3818) ホソバミドリヨトウ *Euplexidia angusta* Yoshimoto
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂長畑,1♂築比地
- (3840) ハスモンヨトウ *Spodoptera litura* (Fabricius)
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♀築比地
 3-4 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比地 30-31 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部,1♂・1♀築比地
- (3923) オオホシミヨトウ *Platysenta illecta* (Walker)
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂築比地 (埼玉県初)
- (3956) フサヤガ *Eutelia geyeri* (Felder & Rogenhofer)
 4-5 Jul.1999 八丁トンネル南 1♀神部,2♂築比地
 5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 1♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部,1♂築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部
- (3965) ヤマトホソヤガ *Lophoptera hayesi* Sugi
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部 (埼玉県初)
- (3974) キノカワガ *Blenina senex* (Butler)
 4-5 Jul.1999 八丁トンネル南 1♀築比地 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂築比地
- (4157) キクキンウワバ *Trichoplusia intermixta* (Warren)
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 1♀神部
- (4162) エゾギクキンウワバ *Ctenoplusia albostrata* (Bremer & Grey)
 5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 1♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部,2♂築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 3-4 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比 30-31 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比地
- (4163) ミツモンキンウワバ *Acanthoplusia agnata* (Staudinger)
 4-5 Jul.1999 八丁トンネル南 2♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 2♂築比地
 5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 1♀神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂・2♀神部 30-31 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 3-4 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比地
- (4170) ウリキンウワバ *Anadevidia peponis* (Fabricius)
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
- (4214) ムラサキアシブトクチバ *Dysgonia maturata* (Walker)
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂神部 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂築比地
- (4215) ホソオビアシブトクチバ *Dysgonia arcotaenia* (Guenée)
 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
- (4239) ムクゲコノハ *Lagoptera juno* (Dalman)
 5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 1ex.確認 築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 3exs.確認 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂築比地
 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1ex.確認 築比地
- (4241) フクラスズメ *Arcte coerulea* Guenée
 5-6 Sep.1999 八丁トンネル南 1♀ 築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂ 築比地 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂築比地
 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1ex.確認 築比地
 7-8 Nov.1999 三国峠 1ex.確認 築比地
- (4260) アカキリバ *Anomis mesogona* (Walker)

- 11-12 Sep.1999 三国峠 1♂築比地 3- 4 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 (4265) ムラサキオオアカキリバ *Anomis longipennis* Sugi
 4- 5 Jul.1999 八丁トンネル南 1♂神部 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂神部,1♂築比地
 (4276) アカエグリバ *Oraesia excavata* (Butler)
 3- 4 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂築比地 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比地
 9-10 Oct.1999 三国峠 2♂築比地 30-31 Oct.1999 八丁トンネル南 2♂築比地
 (4279) ヒメアケビコノハ *Othreis fullonia* (Clerck)
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♀築比地
 (4281) アケビコノハ *Adris tyrannus* (Bueivee)
 9-10 Oct.1999 三国峠 2♂築比地 7- 8 Nov.1999 三国峠 2exs.確認 築比地
 (4285) ムーアキシタクチバ *Hypocala deflorata* (Fabricius)
 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂長畑,2♂築比地
 30-31 Oct.1999 八丁トンネル南 1♀築比地
 (4300) ハガタクチバ *Daddala lucilla* (Butler)
 5- 6 Sep.1999 八丁トンネル南 1♂築比地
 9-10 Oct.1999 三国峠 1♂・1♀神部,1♀築比地
 11-12 Sep.1999 三国峠 1♀神部,1♂築比地
 10-11 Oct.1999 八丁トンネル南 1♂・1♀築比地

考察

1 : 記録地の特徴

- 「八丁トンネル北」 標高: 1220m
 地形: 急傾斜地 (谷地形の上部)
 植生: 高木の少ない2次林. ヒノキ科樹木もある.
 視界: 見晴らしは, 北東方向へ開けている. 北西方向は, 一見すると尾根によって遮られている. しかし, 調査地点を地形図によって鳥瞰すると, 北西方向を遮蔽している尾根との標高差は少ない. よって北側上空は広く開けているとみなすことも可能である.
- 「八丁トンネル南」 標高: 1240m
 地形: 急傾斜地がめだつものの緩斜面もあり, 地形変化に富む谷.
 植生: いわゆる太平洋側のブナ林. 高木化したイヌブナが認められる. 針葉樹の高木・老木はない. 比較的古い2次林と思われる.
 視界: 植生と地形の関係から見晴らしは悪い. 上空が開けているにすぎない.
- 「三国峠」 調査地点: 埼玉県大滝村と長野県川上村(かわかみむら)の境界線から5m程度埼玉側. 標高: 1720-1730m
 地形: 尾根(鞍部)
 植生: 三国峠の北側の尾根はミズナラの老木林. その埼玉県側の下部は2次林. 尾根すじなど, 亜高山性針葉樹の発達は乏しい.
 長野県側は尾根までカラマツの植林がなされている. ときにアカマツもみられる. その下部も広域にカラマツの植林が広がる. 所々にミズナラが認められる. 小規模な乾燥性草原も点在する.
 視界: 良い.

2 : 記録の種類構成について

- a) 「八丁トンネル北」から得られた ヤガ科蛾類の種類構成を調査日ごとにまとめると次のとおり.

10月 3- 4日 偶産蛾	10月 3- 4日 【埼玉県の普通種】	10月10-11日 【埼玉県の普通種】	ネスジキノカワガ
マエグロシラオビアカガネヨトウ	オオバコヤガ	ギンモンシロウワバ	
ムーアキシタクチバ	アカフヤガ	キクキンウワバ	
オスグロホソアツバ	ネスジキノカワガ	オオタバコガ	エゾギクキンウワバ
		ニセタマナヤガ	ミツモンキンウワバ
		アカフヤガ	ウリキンウワバ
10月10-11日 偶産蛾	クロモンシタバ	コウスチャヤガ	ムラサキアシブトクチバ
マエグロシラオビアカガネヨトウ	ムーアキシタクチバ	シロモンヤガ	ムクゲコノハ
ホソバミドリヨトウ	ヒメアケビコノハ	キミヤクヨトウ	フクラスズメ
シロナヨトウ	オオルリオビクチバ	チャイロカドモンヨトウ	アカエグリバ
オオホシミミヨトウ	オオトビモンアツバ	ハスモンヨトウ	アケビコノハ
シンジュキノカワガ	オオトビモンアツバ	カラスヨトウ	ハガタクチバ
クロテンキノカワガ	コテングアツバ	フサヤガ	トビモンアツバ
		キノカワガ	

10月15日 偶産蛾	10月15日 【埼玉県の普通種】	ムクゲコノハ	10月17日 偶産蛾
ホソバミドリヨトウ	キバラケンモン	ワタアカキリバ	ムーアキシタクチバ
オオホシミミヨトウ	ニセタマナヤガ	アカキリバ	ヒメアケビコノハ
ヤマトホソヤガ	アワヨトウ	アカエグリバ	
シンジュキノカワガ	ハスモンヨトウ	アケビコノハ	【埼玉県の普通種】
ツキワクチバ	フサヤガ	ハガタクチバ	ホソバアシブトクチバ
ムラサキアシブトクチバ	エゾギクキンウワバ	ナカジロシタバ	
ムーアキシタクチバ	ミツモンキンウワバ	マエテンアツバ	
ハリホシキタクチバ	オウモンクチバ	トビモンアツバ	
ヒメアケビコノハ			
オオルリオビクチバ			
ナミテンアツバ			
オオトビモンアツバ			
アオアツバ			
オスグロホソアツバ			
コテングアツバ			
ハナトガリアツバ			

b) 10月の「八丁トンネル北」から得たヤガ科蛾類の一部は、大滝村の2か所からも得ている。調査地と調査日を分け、それぞれの種類構成を示す。

【八丁トンネル南】

【三国峠】

5月15-16日 コウスチャヤガ アカフヤガ	10月 3- 4日 アワヨトウ ハスモンヨトウ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ アカキリバ アカエグリバ	10月30-31日 ハスモンヨトウ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ ムーアキシタクチバ アカエグリバ	10月 9-10日 オオタバコガ ニセタマナヤガ コウスチャヤガ アカフヤガ シロモンヤガ キミヤクヨトウ アワヨトウ	ホソバミドリヨトウ ハスモンヨトウ フサヤガ ヤマトホソヤガ キクキンウワバ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ ウリキンウワバ ムラサキアシブトクチバ ムクゲコノハ フクラスズメ ムラサキアシブトクチバ アカエグリバ ヒメアケビコノハ アケビコノハ ハガタクチバ
7月 4-5日 フサヤガ キノカワガ ミツモンキンウワバ ムラサキアシブトクチバ	10月10-11日 オオタバコガ ハスモンヨトウ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ ウリキンウワバ ムラサキアシブトクチバ ホソバアシブトクチバ ムクゲコノハ フクラスズメ アカエグリバ ムーアキシタクチバ ハガタクチバ	【三国峠】 9月11-12日 オオタバコガ コウスチャヤガ シロモンヤガ ホソバミドリヨトウ ハスモンヨトウ オオホシミミヨトウ フサヤガ キノカワガ キクキンウワバ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ ムラサキアシブトクチバ	ムクゲコノハ フクラスズメ アカキリバ ハガタクチバ	
9月 5-6日 ニセタマナヤガ アカフヤガ シロモンヤガ フサヤガ エゾギクキンウワバ ミツモンキンウワバ ムクゲコノハ フクラスズメ ハガタクチバ				11月 7- 8日 フクラスズメ アケビコノハ

c) 「八丁トンネル南」と「三国峠」から得たヤガ科蛾類のうち、「八丁トンネル北」との共通

種からまとめると次のとおり。

	八丁		記録の解釈		八丁		記録の解釈
	トンネル南	三国峠			トンネル南	三国峠	
オオタバコガ	(+)	(+)	埼玉県の普通種	エゾギクキンウワバ	(+)	(+)	埼玉県の普通種
ニセタマナヤガ	(+)	(+)	〃	ミツモンキンウワバ	(+)	(+)	〃
コウスチャヤガ	(+)	(+)	〃	ウリキンウワバ	(+)	(+)	〃
アカフヤガ	(+)	(+)	〃	ムラサキアジトクチガ	(+)	(+)	〃
シロモンヤガ	(+)	(+)	〃	ホソビアジトクチガ	(+)	(-)	〃
キミヤクヨトウ	(-)	(+)	〃	ムクゲコノハ	(+)	(+)	〃
アワヨトウ	(+)	(+)	〃	フクラスズメ	(+)	(+)	〃
ホバミドリヨトウ	(-)	(+)	偶産蛾	アカキリバ	(+)	(+)	〃
ハスモンヨトウ	(+)	(+)	埼玉県の普通種	ムラサキオアカキリバ	(+)	(+)	偶産蛾?
材ホシミヨトウ	(-)	(+)	偶産蛾	アカエグリバ	(+)	(+)	埼玉県の普通種
フサヤガ	(+)	(+)	埼玉県の普通種	ヒメアケビコノハ	(-)	(+)	偶産蛾
ヤマトホソヤガ	(-)	(+)	偶産蛾	アケビコノハ	(-)	(+)	埼玉県の普通種
キノカワガ	(+)	(+)	埼玉県の普通種	ムアキシタクチバ	(+)	(-)	偶産蛾
ククキンウワバ	(-)	(+)	〃	ハガタクチバ	(+)	(+)	埼玉県の普通種

d) 調査地と調査日ごとに種類数でまとめると次のとおり。下の表の「偶産」は偶産蛾を示し、「普通」は『埼玉県の普通種』を示す。

八丁トンネル北				八丁トンネル南				三国峠			
調査日	偶産	普通	合計	調査日	偶産	普通	合計	調査日	偶産	普通	合計
10月 3- 4日	3種	3種	6種	5月15-16日	--	2種	2種	9月11-12日	2種	14種	16種
10月10-11日	14種	24種	38種	7月 4- 5日	1種	3種	4種	10月 9-10日	4種	19種	23種
10月15日	16種	17種	33種	9月 5- 6日	--	9種	9種	11月 7- 8日	--	2種	2種
(10月17日	2種	1種	3種)	10月 3- 4日	--	6種	6種				
				10月10-11日	1種	11種	12種				
				10月30-31日	1種	4種	5種				

3 : まとめ

a) 「八丁トンネル北」の偶産蛾は22種。『埼玉県の普通種』は33種。合計55種類のヤガ科蛾類を報告した。

b) 今回の報文によって、埼玉県初記録となる10種を報告した。

「八丁トンネル北」からマエグロシラオビアカガネヨトウ・クロテンキノカワガ・ヘリボシキシタクチバ・オオルリオビクチバ・アオアツバ・オスグロホソアツバ・ハナトガリアツバの7種。「八丁トンネル北」と「三国峠」の2か所からオオホシミヨトウ、ヤマトホソヤガの2種。「八丁トンネル北」、「八丁トンネル南」、「三国峠」の3か所からムラサキオアカキリバを1種。合計10種。ただし、埼玉県の蛾類の総種類数はムラサキオアカキリバの件で9種増加となる。

c) 「八丁トンネル北」だけから得られ、「八丁トンネル南」と「三国峠」では得られなかった種。

キバラケンモン、オオバコヤガ、チャイロカドモンヨトウ、マエグロシラオビアカガネヨトウ、シロナヨトウ、カラスヨトウ、シンジュキノカワガ、ネスジキノカワガ、クロテンキノカワガ、ギンモンシロウワバ、オウンモンクチバ、ワタアカキリバ、クロモンシタバ、ツキワクチバ、ヘリボシキシタクチバ、オオルリオビクチバ、ナカジロシタバ、オトウウスグロクチバ、マエテンアツバ、タケアツバ、ナミテンアツバ、オトビモンアツバ、トビモンアツバ、アオアツバ、オスグロホソアツバ、コテングアツバ、ハナトガリアツバ

偶産蛾：16種、『埼玉県の普通種』：11種、合計27種。

d) 「八丁トンネル北」・「八丁トンネル南」・「三国峠」の3地点から得られた注目すべき種。

偶産蛾と思われるムラサキオアカキリバは埼玉県では市川(1978)に記録されたのみ。

筆者らは戸田市立郷土博物館の厚意により、収蔵標本から確認することができた。記録に対応する標本は汚損個体であったが、触覚・翅形・斑紋の特徴から、ハガタキリバであった。この記録は無効となるが、ここに改めて記録することで、直ちに復活する。

井上ほか(1982)日本産蛾類大図鑑では「現状では日本の特産種」とするものの、「中国中部、南部産の標本によって、*Anomis maxima* Berio, 1956 が記載され・・・本種との検討を要する」とされた。井上ほか(1982)による国内の記録とシンジュキノカワガの記録の傾向は類似しているように思われる。『埼玉県の普通種』は18種。

e) 「八丁トンネル北」と「八丁トンネル南」の2地点から得られた種。

偶産蛾：ムーアキシタクチバとムラサキオオアカキリバの2種。『埼玉県の普通種』：19種。

f) 「八丁トンネル北」と「三国峠」の2地点から得られた種。

偶産蛾：ホソバミドリヨトウ、オオホシミミヨトウ、ヤマトホソヤガ、ヒメアケビコノハ、ムラサキオオアカキリバ。これら5種。『埼玉県の普通種』は21種。

g) 「八丁トンネル北」と「三国峠」との共通種で、「八丁トンネル南」から記録できなかった種。

キミヤクヨトウ、ホソバミドリヨトウ、オオホシミミヨトウ、ヤマトホソヤガ、ククキンウバ、ヒメアケビコノハ、アケビコノハの7種。

h) 「八丁トンネル北」と「八丁トンネル南」の共通種で、「三国峠」から記録できなかった種。

ホソオビアシブトクチバ、ムーアキシタクチバの2種。

i) 同一地点から複数回の記録を得た偶産蛾

「八丁トンネル北」：マエグロシラオビアカガネヨトウ、ホソバミドリヨトウ、ムーアキシタクチバ、オスグロホソアツバ、オオトビモンアツバ、コテングアツバ、オオホシミミヨトウ、シンジュキノカワガ、ヒメアケビコノハ、オオルリオビクチバ。

「八丁トンネル南」：ムーアキシタクチバ。

「三国峠」：ホソバミドリヨトウ。

j) 過去に埼玉県西部の山地から記録され、今回も記録された種。ただし、県東部低地から記録されていない種で、なおかつ、国外では熱帯・亜熱帯の地域で分布が知られている種。

キバラケンモン・キミヤクヨトウ・ムラサキアシブトクチバ・ムーアキシタクチバ・ヒメアケビコノハ・トビモンアツバ。

これらから、注目すべき種はムラサキアシブトクチバとキミヤクヨトウである。

井上ほか(1982)では山地から記録されることを示されており、埼玉県の例と一致する。この他にも山地から得られやすい傾向の種が存在すれば興味深い。

とくに、キバラケンモンとここに示さなかったムラサキオオアカキリバの2種に偶産性が認められるかどうかである。

k) 埼玉県のシロナヨトウの記録。

埼玉県昆虫誌 I には並木(1982)がある。そこには浦和市田島(1♂ 25-VIII-1974)が示されている。また、この他に萩原・築比地・有山(1996)の記録があり、1ex.1995. 9.29,NH(NHは、萩原昇採集を示す)があり、調査地は戸田市道満(とだし どうまん)の観賞池周辺で実施された灯火採集調査による、と詳しく示されている。よって、本報文では埼玉県の3番目の記録となる。

l) 埼玉県のヒメアケビコノハの記録。

過去の記録は、並木(1983)に記されている。そこには、三峰山(1 ex. 25-VIII-1968 安藤俊之)とある。ちなみに、三峰山とは大滝村の三峰山であり、採集者が安藤氏である。筆者らによる今回の記録は31年ぶりとなる。

m) 埼玉県のタケアツバの記録。

埼玉県昆虫誌 I には井上・市川(1990) から入間市仏子が示された。

戸田市立郷土博物館の収蔵標本を確認させていただいたところ、井上・市川(1990)に対応する、5 X 1989.入間市仏子.井上寛 1♂. 市川(1996) に対応する、22 IX 1989.小鹿野町合角.市川和夫 1♂1♀. このほかに、24 VIII 1990.小鹿野町合角.市川和夫 とされる1個体、これらが保存されていた。

n) 埼玉県のオオトビモンアツバの記録.

過去の記録は市川(1978)に〔1♂ 浦和 28.X.1965〕と記された浦和市の記録のみ。後にこの記録は並木(1984)に引用された。筆者らによる今回の記録は34年ぶりとなる。

o) 埼玉県のナミテンアツバの記録.

過去の記録は並木(1984)に記された。そこには〔三峰山 (1ex.10-V-1964)〕とある。これは並木氏による採集記録。この三峰山とは大滝村の三峰山であり、ロープウェイ山頂駅周辺と思われる。埼玉県昆虫誌 I では大滝村の「大輪」と記されたが、大輪ではなく、三峰山が正しい。しかし、種名から直ちに文献が検索できるので大変やくにたつ。

筆者らによる今回の記録は35年ぶりとなる。

p)ここに記さなかった埼玉県の稀少記録種は比較的最近の記録であり、埼玉県昆虫誌 I から文献の所在を知ることが可能である。

q)「八丁トンネル北」から偶産蛾が得られたことに、地形的な要因はあるのだろうか。

「八丁トンネル北」から偶産蛾が得られた要因を考えると、気象推移と記録の関係が重要である。しかし、ここでは地形的な要因があるかどうかという可能性を示す。

「八丁トンネル北」の地形的な特徴は既に示したが、調査地は北側に開け、見晴らしのよい急傾斜地である。しかも、調査地の直上の稜線は東西方向性で、主にチャートからなるナイフエッジを形成し、起伏も著しい。また、この稜線と調査地点の標高差は300m程度である。

ここで『850ミリバル面の天気図による流線解析法』という方法がある。これは宮田(1986)が花田(1984)を紹介された内容だが、一部の偶産蛾の移動を気象から推定するために有用である。ここでは、その理論から、850hPa面が標高に換算すると1000mから1500mに相当するとされ、筆者らの調査地の標高(1220m)と一致する点を重視したい。しかも、稜線と調査地の標高差の少なさと地形的な特徴により、乱気流が生じ易いだろうと想定できる。

このように、好条件と思われる事項は、

①:地形と調査地の位置関係。②:見晴らしのよさ。③:標高。④:気象。⑤:水銀灯の存在。

⑥:周囲に別の灯火がない。⑦:調査地の西方向に著しい高山がない。⑧:月(月齢)の影響の回避。などが考えられる。

また、「三国峠」からも偶産蛾を得たが、その種類数は少ない。これは調査日と気象条件が不適切だったかもしれないが、負の要因は他にも考えられる。例えば、①:西側の地形が穏やかな点。見晴らしが良いだけでは限界があるかもしれないこと。②:標高は1500mを越え、1720mのために高すぎる可能性。③:「峠」ということで地形的には尾根の鞍部といえるが、著しい凹みでないことなど。

終わりに、今回の舞台となった関東山地ではるか西方向に八ヶ岳-美ヶ原連山が南北方向にある。北西には浅間山連山が東西方向にある。「三国峠」の南に連なる甲武信ヶ岳や国師ヶ岳など。これら2000m級の山々は『850hPa面の気塊』にどのように作用するのか。

関東山地では、山梨県-東京都側と埼玉県北西部-群馬県側が標高的に偶産蛾を得やすい地域と、現時点では推定する。気象変化のタイミング・標高・地形・時期等を適切にとらえることで、本当に偶産蛾等を得やすい「条件」となれば興味深い。

r) 1999年夏の気象の特徴.

これほどまとめて偶産蛾を得た背景として、地球温暖化の影響。さらに、今年(1999年)の夏の気象と関係があれば興味深い。とくに今夏は太平洋高気圧の勢力が弱く、その中心が例年と比較して北東に偏った状況が継続した。これは赤道低圧帯が北へ移動し、南西諸島で台風が発生したこと。その結果、本州南岸が亜熱帯様の気候になった一連の現象である。

s) 今回の一連の調査では飛来個体数のカウントをしていない。そこで、あくまでも参考資料としてであるが、1999年10月10-11日に「八丁トンネル北」で受けた印象を次のように示す。

(+): 10~30個体程度, (++) : 30~100個体, (+++) : 100~300個体,
(++++): 100~300個体, あるいはそれ以上の「無数」とする。

(++++): ハスモンヨトウ,

(+++): エゾギクキンウワバ, ミツモンキンウワバ. アカエグリバ.

(++) : カラスヨトウ, ニセタマナヤガ, シロモンヤガ, フサヤガ, キクキンウワバ,
ウリキンウワバ, アカキリバ, アケビコノハ, ムクゲコノハ, ムーアキシタクチバ,
フクラスズメ, ヒメアケビコノハ, ハガタクチバ.

(+) : ホソバミドリヨトウ, キノカワガ.

例えば, ムーアキシタクチバはこのように多量の飛来があり, 10月15日も同様であった.
タイワンキシタクチバなど同属の未記録種の有無は不明である.

t) 今回の一連の調査では発見できなかった偶産蛾の例 (主にヤガ科)

ミドリリング, ツクシアオリング, シロスジクロホソヤガ, シラホシアシプトクチバ,
ヨコツナトモエ, キマエコノハ, チャマダラホソヤガ, ホソバヨトウ, アカマダラヨトウ,
アフリカシロナヨトウ, キンタアシプトクチバ, ヘリグロクチバ, コヘリグロクチバ,
オオシラホシアシプトクチバ, キオピアシプトクチバ, サンカクチバ, チズモンクチバ,
オオムラサキクチバ, ミドリモンコノハ, クロミモンクチバなど.

ヤガ科ではないが, スズメガ科ではエビガラスズメが目立ったのみ. キョウチクトウスズメなどもみられなかった.

u) 今回(10月)の「八丁トンネル北」での採集では, 飛来個体の構成が, 個体数の点で南方系種の占める割合が高かった. このため, 在来種は影をひそめ「自分たちは, いったいどこにいるのか」と錯覚するほど異様であった.

謝辞

故市川和夫氏のコレクションから, ムラサキオオアカキリバとタケアツバの確認は戸田市立郷土博物館の厚意により実現したものである.

古い標本にもかかわらず, 報文に使われた標本は即座に確認することができ, 記録精度の向上のために有用であった. ここに深くお礼を申し上げます.

文献

- 市川 和夫 (1978) 埼玉県の蛾類. 埼玉県動物誌 (埼玉県教育委員会).
井上 寛ほか (1982) 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
並木 彬雄 (1982) 埼玉県のヤガ科(IV). 寄せ蛾記(36): 362.
並木 彬雄 (1983) 埼玉県のヤガ科(VII). 寄せ蛾記(39): 448.
並木 彬雄 (1984) 埼玉県のヤガ科(IX). 寄せ蛾記(41): 498.
宮田 彬 (1986) シンジュキノカワガ. 文一総合出版.
杉 繁郎・中村 正直 (1986) キバラケンモンとその近縁種たち. 月刊むし(189):3-12.
井上 寛・市川 和夫 (1990) 加治丘陵(埼玉県入間市)の蛾類. 加治丘陵自然環境調査報告書.
市川 和夫 (1996) 小鹿野町の鱗翅目(蛾類). 小鹿野町の自然 II 「平地・山地の動植物」.
萩原 昇・築比地 秀夫・有山 智樹 (1996) 荒川第一調節池生物等調査報告書(5) 荒川第一調節池等調査会.
萩原 昇・利根川 雅実・築比地 秀夫・矢野 高広・水室 美芳 (1998) 埼玉県昆虫誌 I (第2分冊).

(かんべ まさひろ 〒340-0035 草加市西町 366-7)

(ついひじ ひでお 〒333-0842 川口市前川 4-13-2)

(ながはた なおかず 〒362-0021 上尾市原市 11-3 越川グリーンハイツ 5号)

1998年 埼玉県でのトンボ生態記録

喜多 英人

1998年に県内で観察したトンボのうち、生態的に興味深いと思われるものを中心に報告する。なお、「採集」と記した以外はすべて目撃（撮影）記録である。

1998年は異常に暖かい春が続いたため、トンボの出現時期がずいぶんと早まった。しかし、夏から秋は雨が多く、天候にはあまり恵まれず、特に増水により川のトンボの観察は困難であった。

関東以西の各地で、オオギンヤンマが多数記録され、筆者も所沢市で観察した。また、アキアカネを筆頭にアカネ属が極端に少ないなど、気象が原因と思われるが、例年とはかなり異なった様相のシーズンとなった。

1. オツネトンボのクリーニングと交尾拒否行動

秩父郡皆野町国神 29. III. 1998 約20♂, 連結産卵約10(AM11:00 - PM13:20)

筆者は、すでにオツネトンボ *Sympecma paeisca* BRAUER の成熟成虫の生態をまとめたが、'98年も継続して観察し、本種の産卵後のクリーニング行動と♀の交尾拒否行動を観察した。

この日は、熊谷で最高気温が25.5℃に達するなど、汗ばむような陽気で、池畔には少なくとも10カップルが産卵のために訪れていた。そのうちの1カップルは、水面からわずか10cmに伸びたショウブの新芽の水上部分に連結産卵していたが、徐々に産卵しながら水面の方へと降りてきた。そして、腹端が水面まで達すると、産卵を中止し、♀は肢で頭部や腹部をクリーニングしはじめた。その後、♂は連結を解き、飛び去った(PM13:20)。♀はしばらくそのまま残り、さらに肢、頭のクリーニングを続けた(写真1)。♀もその後、飛び立ったが、その時、先ほど連結していたのとは違う♂に見つかり追尾された。すると♀は、腹部をやや下方へ曲げながらさらに上空へ上がっていった。そうすると♂は連結をあきらめ、♀は逆側の岸辺へと逃げ去った。

なお、3月29日というのは、本県における本種の産卵日としては、最も早い記録である。

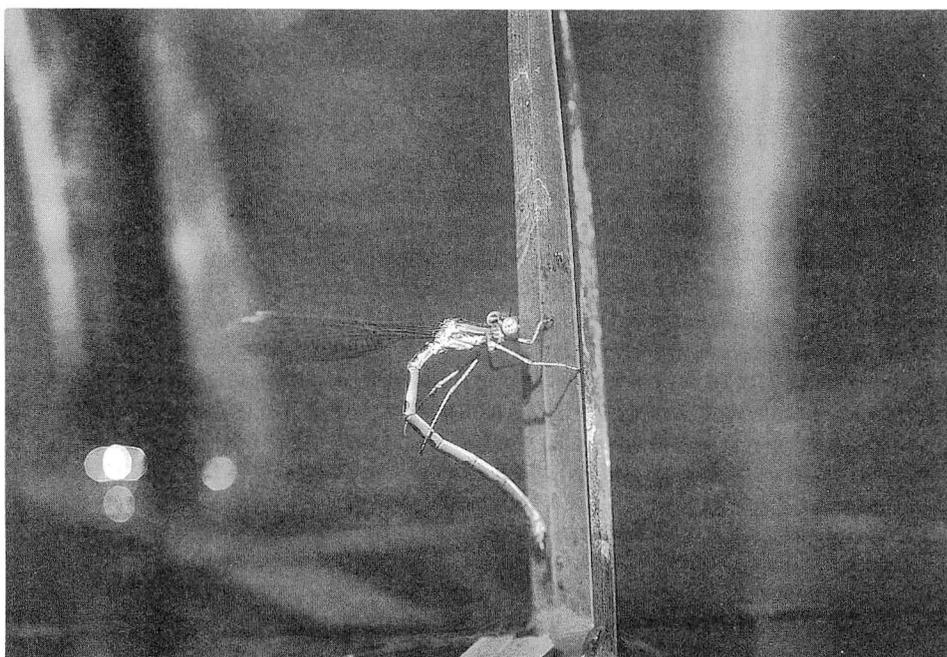


写真1：産卵後クリーニングするオツネトンボの♀

2. 春のサナエトンボ羽化調査 (“羽化” と表示のないものは羽化殻のみ)

- ホンサナエ *Gomphus postocularis* SELYS
 東松山市都幾川 26. IV. 1998 61exs. 採集
- ダビドサナエ *Davidius nanus* SELYS
 東松山市都幾川 26. IV. 1998 5exs.
- アオサナエ *Nihonogomphus viridius* OGUMA
 東松山市都幾川 26. IV. 1998 2♂羽化
 嵐山町都幾川 10. V. 1998 44exs.
- ヤマサナエ *Asiagomphus melaenops* SELYS
 比企郡小川町中爪 10. V. 1998 2♀羽化
- キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* SELYS
 東松山市都幾川 10. V. 1998 4exs. 採集; 17. V. 1998 1ex 採集

都幾川のホンサナエは、ここ数年、成虫の最盛期である5月中～下旬の記録は散見されるものの、羽化期のものはあまりなかった。筆者は、毎年羽化殻調査をしているが、1日に60以上もの羽化殻を見たのは初めてであり、驚いた。いずれもやや汚損しており、実際の羽化は4月中旬頃に多数行われたものと思われる。また、羽化殻は都幾川本流以外にも、キイロサナエが生息する水路からも多数発見された。成虫は、今年はやや上流の嵐山町で観察したのみであるが、すでに老熟していた。なお、これらの羽化殻の標本は、背棘、側棘について松木和雄氏により分析され、筆者と共著で本誌92号に報告した。

キイロサナエは、'96年には今回と同じ場所で、5月25日に約10exs.の羽化が見られ、6月1日まで確認された。筆者は、羽化の最盛期は5月下旬頃で、これは同所でのヤマサナエより約20日、千葉県印西市よりも約2週間遅いものと推定していた。また、'97年に松崎は、やはり同所で5月12日に羽化を観察し、これは例年より数日早い、と報告している。'98年は5月10日と17日に羽化殻を採集したが、すでに古びており、'97年よりさらに早かったものと思われる。

ヤマサナエは、都幾川ではゴールデンウィークの頃が羽化の最盛期であるが、小川町のこの産地は、山すその湧き水で水温が低いせいか、やや遅いようだ。

3. 羽化直前のコシボソヤンマの幼虫について

筆者はすでに、埼玉県寄居町でコシボソヤンマ *Buyeria maclachlani* SELYS の羽化について本誌に報告したが(喜多, 1998)、今年も観察を継続した。その結果、羽化直前の幼虫は、カエルの強い捕食圧にさらされていることが判明し、またそれを避けるため、早朝の羽化を選択することが推測された。

- 大里郡寄居町 12. VII. 1998 羽化殻なし
 18. VII. 1998 定位している幼虫1ex.
 20. VII. 1998 羽化殻5exs. 幼虫 2exs.

羽化時期は、'98年も7月20日前後であり、例年とほぼ同様であった。7月18日には、午前6時頃、岸辺のイグサ属植物の50cm位に定位している幼虫を発見した。体を左右に振り、羽化前の安全確認をしている状況であったが、観察のため近づきすぎて驚かしたためか、しばらくすると水中に戻り、羽化は行われなかった。この日は、その他の幼虫や羽化殻は見ることができなかった。

2日後に再び調査した後、新鮮な羽化殻5exs.を認めた。これらは、前日か当日の朝に羽化したものと思われた。しばらく付近を調査した後、午前7時30分頃、先ほど羽化殻を観察したノハナショウブの根元を何気なく覗いてみると、本種の羽化直前と思われる幼虫が2頭、頭部を水面に向けてじっとしている。そしてその周りには、4匹ものツチガエルが、これまたまったく身動きもせず、胸から上を水面から出した状態でじっとしている。これらの幼虫は、筆者が観察のため近づくと、茎の裏側に隠れようとしてわずかに動くが、それ以外は殆ど身動き一つしない。たまに、肢がわずかでも動くと、カエルの目は敏感に反応する。おそらく、カエルは動くものを餌として認識し、幼虫はそのことを本能的に知っていて、動かないのだろう。

これらの幼虫は、時間が羽化の時刻としては遅いこと、カエルに睨まれたこの状態では羽化はしないと考え、他の場所を調べて8時30分頃、再びこの場所に戻った。すると2頭いた幼虫が1頭になっており、水中に戻ったのかと思ったが、付近を捜してみると、右中肢をカエルに食いつかれている幼虫を発見した(写真2)。撮影のため、追いまわすとカエルは、幼虫を放し、幼虫は無事、水中に逃げ込んだ。



写真2：ツチガエルに襲われたコシボソヤンマの幼虫

それでは、なぜこんな危険を冒してまで、安全なはずの水中を脱して、陸上でじっとしているのだろう。ムカシトンボやカトリヤンマ、また本種においても羽化前に陸上生活をする幼虫が観察されているが、この理由は、水中から大気中での呼吸方法の変換になれること以外に今ひとつはきりしない。今回の観察でも、陸上で生活している理由はよくわからなかったが、昨年観察した♂の羽化は、午前7時5分にはすでに終了しており、ツチガエルが活動を始める午前7時頃には、通常は羽化を終了してしまうものと思われる。万が一、この時間帯に羽化を開始しても、このような状況では、カエルに捕食されてしまうであろう。これらのことから、本種幼虫は、ムカシトンボなどとは異なり、羽化直前にあえて、陸上生活を選択しているとは考えにくい。むしろ、羽化のため水中から出てきたもの、羽化場所が定まらなかったり、天敵であるカエルの気配を感じ、時間の経過とともに羽化をあきらめ、次のチャンスを待っているというあたりが真相なのかもしれない。

4. 里山のトンボ カトリヤンマの危機

'97年に筆者は、新井と共著で、カトリヤンマ *Gynacantha japonica* BARTENEF の生態について、総説的なまとめを行ったが、この中で寄居町の産地が現在消滅の危機にある。最盛期には、1日に50頭もの産卵を観察できた生息地である。

その理由は簡単である。羽化の多かった、小川の上流にあたる7面の水田(図1のA~G)の耕作が'97年には行われなかったからである。もともと、ほとんど羽化しなかった下流側の水田は耕作が行われているものの、2面の水田(KとL)からわずか3exs.の羽化殻を採集したのにとどまった。また、上流側では、稲作の代わりにクレソンを栽培するため以前からあった水路(DとEの間)を掘ったが、この水路で8月23日に羽化直前の幼虫と中齢幼虫を約20頭認めた(写真3)。しかし、以前は8月中旬が羽化の最盛期であったにもかかわらず、8月下旬でも羽化殻は1つも見つからなかった。この水路は、沢から直接水を引いているため、水温が低く、水田の時よりも羽化が遅れたのかもしれない。結局、この水路からはその後も羽化殻を発見することはできなかった。

いづれにしても、水路に幼虫がころうじて生き残っていたものの、すでに水田には雑草が生え、休耕田化していた(写真4)。このような状況下では、たとえ幼虫が無事羽化したとしても、産卵に適した環境は少なくなっていることから、本年以降の発生が危ぶまれる。

付近の住民に聞いたところ、この水田の地主は、高齢化により、農作業が続けられなくなり稲作を止めたとのことである。なんとと言っても、若夫婦ですでに60代！これが現実である。

筆者は、本種が水田と深く関わって生活していることを明らかにしてきた。図らずも、今回、自分のフィールドにおいて、本種の絶滅へのプロセスを目の当たりにして、本種の衰亡が水田の休耕田化にあることを証明することとなってしまった。

本種は山間の水田が主生息地である。これらの水田は、ほとんどが自家用のため、農薬をあまり使用せず、多種多様な生物の発生源となってきた。中でもカトリヤンマはその代表である。しかしながら、このような水田は山間のため、機械化が難しく、高齢者には農作業が負担となりや

すい。しかも若者は、都会に出て、高齢者のみが細々と耕作を続けているのが現状であり、近い将来、さらなる高齢化により、放置、休耕田化されていく運命にある。

なお、同所で'98年9月20日に今まで記録がなかったヒメアカネ *Sympetrum parvulum* BARTENEF 1♂を確認した。水田であった頃には見られなかった種類である。水田が休耕田化されていく変遷の中で現れる種類であるが、すでに1年目で進出してきたのは興味深い。

これに対して、カトリヤンマは、このままだと近いうちに関東近辺では、観察することが極めて困難な種類になるのではないかと危惧している。このように、本種は、徐々に減少していくよりも、稲作の状況により、ある時にぱっといなくなってしまう。その意味で保護の難しい種類であると言える。

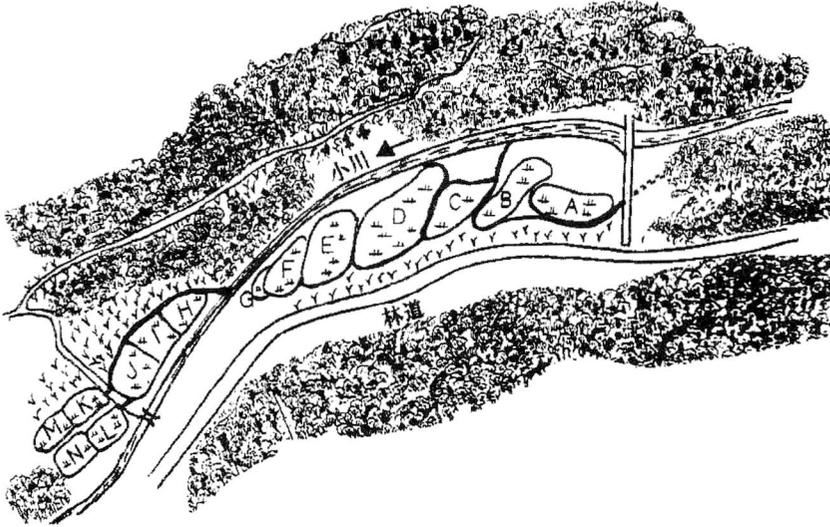


図1：寄居町の水田（新井作図）



写真3：水路でのみ見つかったカトリヤンマの幼虫



写真4：休耕田化した水田

5. アカネ属の羽化時期について

'98年はアキアカネを筆頭に、アカネ属を観察する機会が少なかった。これは、本県に限らず、全国的な傾向であったようだ。

アカネ属数種の羽化について観察したので、簡単に報告しておく。

ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum elatum* SELYS

大里郡寄居町 20. VII. 1998 羽化多数 20. IX. 1998 2♀羽化

本種は羽化期が長い。約2ヶ月に及ぶ。

ヒメアカネ *Sympetrum parvulum* BARTENEF

大里郡寄居町 12. VII. 1998 羽化直後多数

秩父市栃谷 5. IX. 1998 羽化直後多数

マユタテアカネ *Sympetrum etoricum* SELYS

大里郡寄居町 12. VII. 1998 2~3exs. 羽化直後.

秩父市栃谷 5. IX. 1998 1ex. 羽化

ネキトンボ *Sympetrum speciosum* OGUMA

秩父市栃谷 5. IX. 1998 3exs. 羽化

本種も羽化期が長い。3頭の羽化が見られたこの日、多数のみと連結産卵を5組観察した。

<参考文献>

新井 裕 (1986) カトリヤンマの生活史 インセクトリウム 23:14-17

喜多英人 (1997) 水田を生息場所とするカトリヤンマの生態(I) 月刊むし(320): 8-12

枝 重夫 (1964) 羽化直前のムカシトンボ幼虫の行動 Tombo 7:13-6

喜多英人 (1997) 1996年 埼玉県でのトンボ記録 寄せ蛾記 (83): 2320-2322

(1998) オツネントンボ成熟成虫の生態 寄せ蛾記 (85): 2424-2429

(1998) 1997年 埼玉県でのトンボ記録 寄せ蛾記 (87): 2501-2507

斎藤 清 (1997) 埼玉県内でのトンボ採集記録 寄せ蛾記 (82): 2263-2268

西田時弘 (1992) 県内におけるトンボ数種の生態的知見 房総の昆虫 (7): 8-10

松崎雄一 (1997) 埼玉県蜻蛉目調査(6) 1997年4~6月 寄せ蛾記 (84): 2376-2378

埼玉県のダルマガムシ類について

豊田 浩二

ダルマガムシの仲間は水辺の落葉中や岩の表面等に生息する、体長2ミリメートル程度の微小甲虫類である。ガムシといっても近年の分類体系ではガムシ上科ではなくハネカクシ上科に含まれている。淡水域だけでなく海浜性の種もいくつか知られていて、北海道では岩礁地帯でイワハムシといっしょにこの仲間が採集される。

埼玉県内のダルマガムシ類の最初の記録は *Hydraena riparia* (KUGELAN) ホソダルマガムシが小鹿野町日尾の吉田川より知られており(大熊・黒澤, 1992, 同, 1995), 埼玉県昆虫誌の発刊された時点でこれが唯一のものであった。また、つい最近埼玉県から発見された *Hydraena yoshitomii* JACH et DIAZ は飯能市産の個体を基に新種記載されたものである。これまでこの仲間が見つかりにくかった原因としては、特殊な生息環境に起因する「見つけにくさ」と微小昆虫であるがゆえの「見つけにくさ」の2つが考えられる(というよりは、探す人自体が少ないという話もある)。水辺というあたりでは、甲虫を採る人よりはむしろ、カゲロウの幼虫などを採っている人のほうが目にする機会も多いのでは無かろうか。小鹿野町のリストでも甲虫類の部分ではなく、水生昆虫の部分で記録されていることがその証拠となろう。

筆者は嵐山町の甲虫相調査を進めて行く過程で、水辺の岩の表面に生息する特異な甲虫類がいることに気づき、県内各地でこれらの種を調べてきた。その中には *Anthicus laevipennis* ツヤチビホソアリモドキや *Psephenoides japonicus* マスダチビヒラタドロムシ等の、やはりこれまで県内から見つかっていなかった種が含まれており、ダルマガムシ類についても *Ochthebius* セスジダルマガムシ属の種がたくさん得られた。しかしながら筆者の無知さから種の同定に手間取り、公表できないまま今日に至った。今回、日本鞘翅学会第12回大会の会場において、マルハナノミ類の分類学者である吉富博之氏に同定を依頼したところ、ダルマガムシ類について多大なるご教示をいただき、県内より新たに2種類を追加することが出来た。本稿では既知2種とこれら2種の計4種について、生息環境等の知見も含めて触れたいと思う。

Staphylinoidea ハネカクシ上科

Hydraenidae ダルマガムシ科

1 *Ochthebius hasegawai* NAKANE et MATSUI, 1986 ハセガワダルマガムシ

(埼玉県初記録種)

- 【両神村小沢口小森川】55頭, 6. IV. 1997 (岩のある極狭い範囲のみ, 日当たり良い)。
 【嵐山町鎌形堀川(嵐山溪谷)】11頭, 12. IV. 1997; 1頭, 3. V. 1997; 25頭, 8. VI. 1997; 1頭, 14. VI. 1997; 15頭, 12. IV. 1998; 2頭, 30. V. 1998; 3頭, 29. XI. 1999 (岩畳の場所とその周辺のみ, 日当たり良い)。
 【荒川村安谷川標高750m付近(川浦溪谷)】1頭, 29. IV. 1997 (溪流, 日当たり良い)。
 【小鹿野町日尾吉田川】32頭, 4. XII. 1999 (日陰)。

いずれも筆者採集, 保管。

県内で得られたほとんどの個体はこの種であった。上唇前縁部は大きく凹み、ナカネとは脚の色が黒っぽいと前胸背板側方に明瞭な透明部(薄い板状の部分)があることで容易に識別できる。体長は約2.2~2.4mmで個体によって若干の変異があるものの、ナカネよりはやや小型である。生息環境は溪流部の水際で、岩が剥き出して水しぶきがかかるような場所にまとまって見られる。岩のちょっとしたくぼみに身を沈めており、天気の良い日には岩の表面を徘徊している個体も見受けられた。4月から5月にかけて多く見られるが、吉富氏のご教示によれば成虫越冬の個体が冬季でも得られるとのことであり、実際に試してみたところ嵐山溪谷や小鹿野町日尾の吉田川で越冬個体が得られた。生息環境で特に興味深いのは、川岸の水際よりはむしろ完全に水面に孤立した岩に多く見られたと言うことで、水流の勢いが激しい場所を好むようである。これはマスダチビヒラタドロムシや水辺に生息するハネカクシ類等にも見られる現象であるが、こうした場所には食餌が豊富に存在するのであろうか。

2 *O. nakanei* MATSUI, 1986 ナカネダルマガムシ

(埼玉県初記録種)

【嵐山町鎌形槻川(嵐山溪谷)】1頭, 3. V. 1997(日当たり良い).

【荒川村安谷川標高750m付近(川浦溪谷)】1頭, 29. IV. 1997(滝周辺, 日当たり良い).

いずれも筆者採集, 保管.

ハセガワと同様の環境で, 嵐山溪谷で1頭, 川浦溪谷で1頭が得られた. めずらしい種で, たくさん採れることは少ないようであるが, 種の存続を思えばいまいし個体数が採れても良いように思う. 恐らく想像もつかないような場所にたくさん潜んでいるに違いない. 川浦溪谷での採集例を挙げると, 落差5メートルほどの滝のすぐ下で, たいへん日当たりの良い岩の水際であった.

脚の色彩は黄色で, 金緑色の光沢が前胸や頭部に顕著な美しい種である. 体長はハセガワに比べて一回り大きい(嵐山溪谷の個体は2.6mm, 川浦溪谷の個体は2.5mm). 前胸背板の縁に見られる透明部はほとんど目立たず, 前胸前縁もハセガワは角張るのに対し, 本種は丸みを帯びて緩やかに角張るので容易に識別できる.

3 *Hydraena yoshitomii* JACH et DIAZ, 1999

【両神村両神山白井差標高1,000m付近(昇竜の滝上流)】1頭, 10. V. 1997(日陰). 丸山宗利採集, 筆者保管.

昇竜の滝上流部にある小さな滝で, プールの縁に溜まった落ち葉中より得られた. 本種は JACH and DIAZ (1999) により, 埼玉県飯能市戸丸産の個体を基に新種記載されたもので, 種名は採集者の吉富博之氏にちなむ. 体長は1.4~1.6mmと小型で, 体色は暗褐色, 脚と小顎鬚は黄褐色を呈す. なお, 基準産地以外で得られたのは今回が初めてである. 筆者はこの個体のほかに東京都青梅市御岳山で自身により採集した1頭を保管しているが, やはり同様の環境下で採集したものである.

4 *H. riparia* (KUGELAN, 1794) ホソダルマガムシ

【小鹿野町日尾吉田川】1頭, 28. V. 1989(溯上, 昼間). 大熊・黒澤, 1992及び大熊・黒澤, 1995より引用.

上記文献のデータが判りにくい記載であるため, 文献中より読み取れるそれぞれのデータを基に筆者の判断でまとめてみた. 本種が得られた小鹿野町の日尾地区は, 合角(かっかく)ダムの建設によって水没等の影響を受けるのではと警戒されていた地区であるが, 筆者がこの地を訪れた1999年12月現在では水底に沈む心配は無いようであった. しかしダム建設の余波とでも言おうか, 上流部の車道に沿った部分でコンクリートブロックによる護岸が始まっており, せっかく残っている河川敷を埋め立てている様子を見て, 改めてダム建設の環境に及ぼす影響を目の当たりにした次第である. 辛うじて手の入っていない辺りを調べてみたところ, 5分と立たぬうちにハセガワダルマガムシが見つかり, 他にも *Hydrocassis lacustris* マルマガムシが沢山見られるなど, すばらしい水生昆虫相が保たれていることが再確認された. ホソダルマガムシに関しては残念ながら今回は追加個体を得ることは出来なかったが, 春季に再度調査を試みたい.

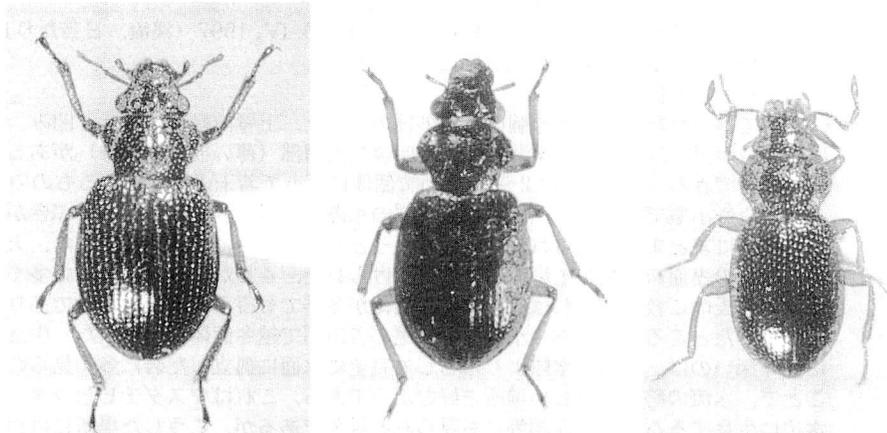


図1. 埼玉県産ダルマガムシ類3種(左:ハセガワダルマガムシ, 中:ナカネダルマガムシ, 右: *Hydraena yoshitomii*)

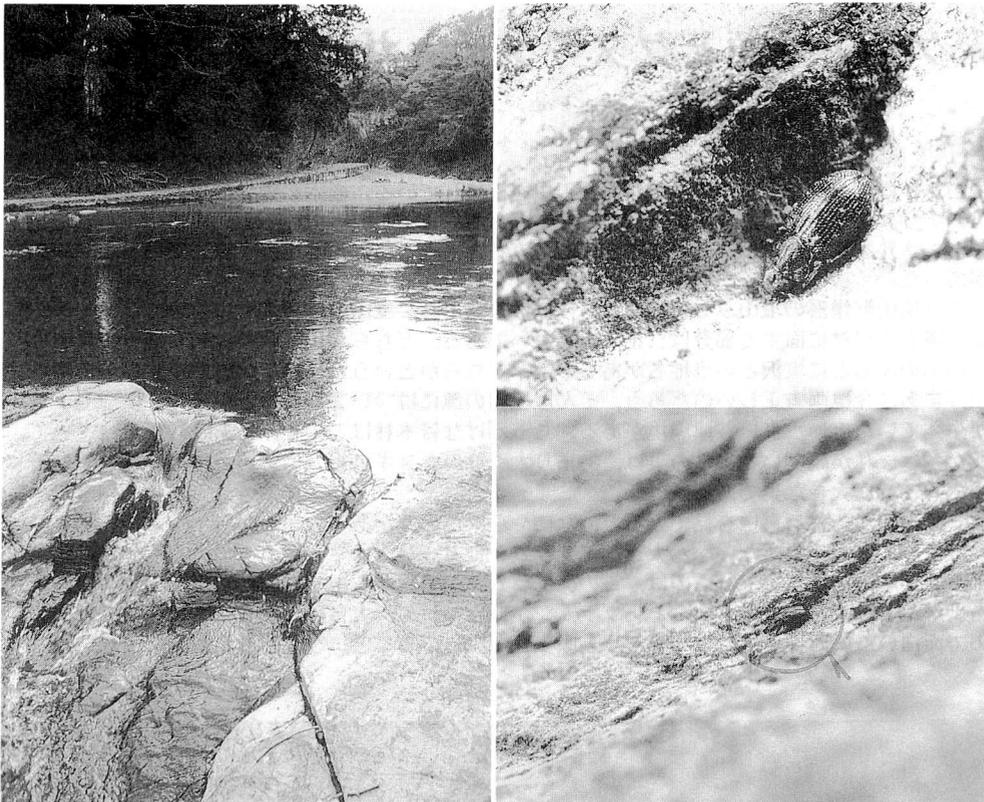


図2. 嵐山溪谷のダルマガムシ類生息環境（左）と岩の水際でくぼみに潜むハセガワダルマガムシ（右上，右下）

埼玉県内のダルマガムシ類は当然の事ながらすべて淡水性の種であり、いずれも溪流環境下から見出されている。今後はこうした環境を丹念に調べることで、さらなる新産地が見出されることであろう。また定かではないが、湿地や池に生息する種が分布している可能性もあるので、こうした環境下でも注意が必要であろう。

末筆ながら、標本同定等いろいろとご教示頂き発表を薦めてくださった(株)環境指標生物の吉富博之氏に、また貴重な標本を恵みくださりデータの公表を快諾された北海道大学院昆虫体系学教室の丸山宗利氏、文献調査で御世話になった東京農業大学昆虫分類研究室の新井志保、同大学の石川 忠の両氏に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 大熊光治・黒澤與四郎, 1992. 合角ダム水没地域とその周辺の水生昆虫類. 秩父合角ダム水没地域総合調査報告書 [上巻] 自然編. pp: 355-378. 合角ダム水没地域総合調査会 (小鹿野町教育委員会内). (実際に配布されたのは1998年)
- 大熊光治・黒澤與四郎, 1995. 小鹿野町自然環境調査報告書. 小鹿野町の自然特「水辺の動植物」水生昆虫類. pp: 71-107. 小鹿野町. (記録の内容は前の文献と同じ)
- JACH, M. A. and J. A. DIAZ, 1999. Description of Two New Species of *Hydraena* KUGELANN from Honshu, Japan, with a Check List of the Japanese Species (Coleoptera, Hydraenidae). *Jpn. J. syst. Ent.*, 5(2): 337-340.

クサアリ類とクヌギクチナガオオアブラムシ

豊田 浩二

ここ2年ほど、クサアリ類の巣で好蟻性甲虫を採集している。樹木の根元に作る大きな巣の上には、アリ共が木の幹に沿ってのぼって行く姿がある。目でたどってみると、樹皮に作られた土壁のトンネルを見つけた。土壁をそっと壊してみると、そこには何かを丸く囲んでいるアリ共の姿があった。

ここは嵐山町鎌形の塩山ふもとにあるちっぼけな雑木林。嵐山では‘塩’山と書くが、地図で見ると隣の玉川村に面する部分は‘正’山と書いてある。どちらが正しいかは判らない。嵐山にはこの山のふもとに塩沢という地名があるので、どちらかという‘塩’の方が正しいのであろうか。まあ、今は両方正しいのだろう。そんな塩山の麓にはつい20年ほど前まで、モウセンゴケが生えていたという良い谷津環境がある。ちっぼけな雑木林はこの谷津にあり、湿気っていて藪蚊が多い。私が観ているアリの巣は、あまり太くないクヌギの根元にある。種類はクサアリモドキで、とても大きな巣である。

アリ共が囲んでいる真中を見てみると、なにやら灰色の塊があるのがわかった。木の枝でアリをどけてみると、それはたいへん大きなアブラムシであった。

アリ共が木の上に乗って行くのは、このアブラムシがお尻から出す甘露が目当てのようだ。土壁を剥がして行くと、次から次へとアブラムシがあらわれる。大きいから小さいのまで沢山いるので面白い。一匹採って持って帰ろうと吸虫管で吸ってみると、びくともしないので驚いた。

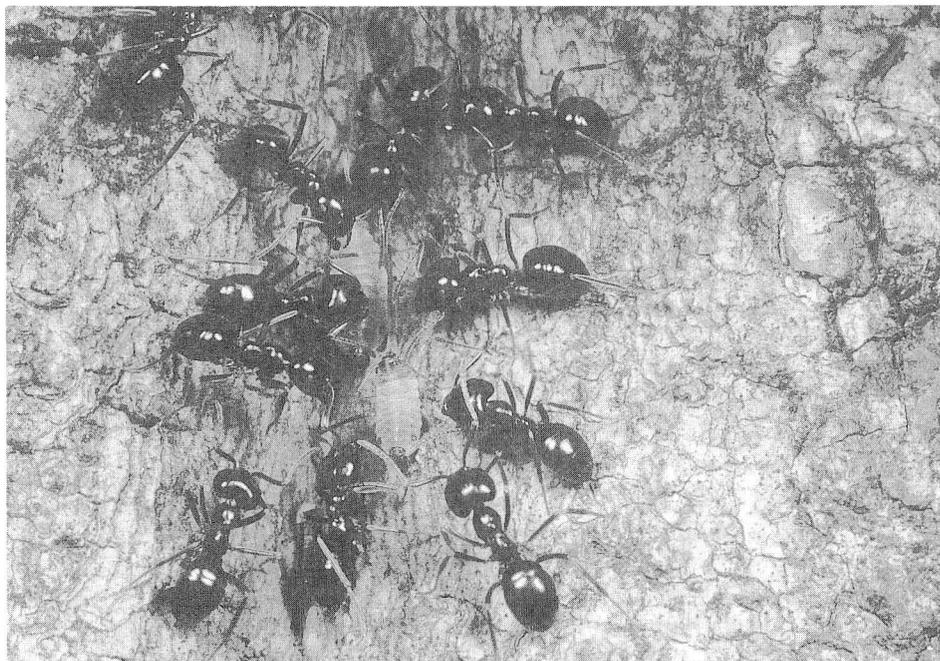


図. アブラムシに群がるクサアリたち (1998.10.10, 嵐山町塩山にて)

いったい何なんだ? と枝でつつくと、このアブラムシは口を分厚い樹皮に突き刺して汁を吸っているのだということがわかった。まあ、アブラムシだから当然と言えばそれまでだが、さらに無理やり引き剥がそうとすると、つつき過ぎて潰れてしまった。「ああ、やってしまった」と思いながらも、次のアブラムシを採り始める。

そもそもアリの巣なんぞを観ようと思ったきっかけは、このころアリツカムシを一生懸命採りはじめたからで、決してアリの生態を懇切丁寧に記録しようと言うものではなかった。好蟻性甲虫については素人同然の知識しかなかったので、何が採れるのかも全く予想がつかなかった。しかしながら初日から巨大なアリツカムシが採れたのに気を良くし、毎週のように通い始めたのである。とにかくアリ共の数の多さには驚かされる。私の家の前には中学校の校庭と石室のフタが空いた古墳があるのだが、幼少のころはもっぱらそこが遊び場であった。ある時校庭の石をどかして大きな黒いアリ共に噛み付かれまくり、それ以来アリ恐怖症であった。いまでもそのアリは苦手である。クロヤマアリなのだが、こいつらはすぐに噛み付く。毛嫌いしているせいもあって、最近まで見向きもしなかった。よって、怖いアリを克服しようという健気な？努力が足を運ばせているのかもしれない。

突然の激痛に「いでえー！」と叫び声をあげ、手を力いっぱい振るう。さっきまでおとなしくしていたアリ共が噛み付いたのである。その瞬間、凶鑑で良く説明のあるアリとアブラムシの共生関係を身にしてみても体験すると共に、恐怖の体験がよみがえった。しかし今はたとえすべてのアリ共に体中を這われようとも、この得体の知れぬアブラムシを採ることの方が優先した。吸虫管で力いっぱい吸いつづけると、スポッと抜けて数匹のアリと共に管内に収まった。蟻酸の匂いに思わずむせる。ふたを空けてのぞいて見ると、今までに見たこともないような長い口を持ったアブラムシであることがわかった。それにしても、おとなしいクサアリが噛み付いてくるとは、二重の驚きにしばし吸虫管の中を見つめる私であった。

アリを中心に見た場合、社会性昆虫であるアリとその周囲を取り巻く動・植物たち、周囲の環境は小さなセットになっているように思えるのだが、この種構成にはたとえ同種のアリであっても、巣ごとに若干の違いが見られるようである。しかも好蟻性の生物は形態的に特異なものが多いので、観ていて飽きることが無い。というより、非常に面白いのである。これまでにこの巣では多大な成果があがっていて、県内初記録にして原記載以降数例目のツノヒゲツヤムネハネカクシといった種類も見つかっている。すばらしい巣であることは明白である。よそでもいくつか巣を見つけて採れる種類の比較をしているが、私の知る限りにおいては県内で一番良い巣である。そんな巣であるからアブラムシの個体数も非常に多い。

口が長すぎるアブラムシはその後も良く見られたので、とりあえず2匹だけ採ってアルコールの液浸標本にした。有翅形も得られたが、やはり長すぎる口はそのままであった。アブラムシの種類など全くわからない私は、普段お世話になっている東京農大の黒須詩子博士にこのアブラムシを持っていった。すぐに同定してくださり、結果がもたらされた。手紙によれば、この種はクヌギクチナガオアブラムシという名前で、クヌギだけでなくコナラからの記録もあることが付されていた。埼玉県からは未記録のようであった。クヌギやコナラの樹液を吸うということは、どこにでもいる種類のはずである。そこでひとつ疑問が湧くのであるが、アリとアブラムシの関係が生まれるには両者が出会わなければならないわけだが、アリが先なのか、アブラムシが先なのかということである。どこにでもいるアブラムシに餌をもらうためアリが集まってくるのか、はたまた根元にアリの巣がある樹木にアブラムシが飛来するのか。最初にアブラムシがいて、そこにクサアリが巣を作るというのはどうも考えにくいので、どちらかという後者のような気がするが、これは形成後まだ若い巣を定期観察することで解決出来よう。

最近この巣の近くでトビイロケアリの巣を見つけたのだが、この巣があるケヤキの幹でも同じようなアブラムシを見かけた。また、別の場所ではエノキの樹皮についている同様のアブラムシに、クサアリモドキが列をなしていた。意外と、アリと共に探し出せば、ケアリ属のいる森林環境にはどこにでもいるものなのかもしれない。私はこうしたムシ達が手軽に観察できる‘ちょっと良い環境’が身近にあることにとても感謝している。これからもアリの巣の観察を続けて行きたい。

末筆ではあるが、アブラムシについてご教示いただいた東京農業大学昆虫学研究室の黒須詩子博士に厚く御礼申し上げる。県内初記録の種であるので、以下に詳細なデータを付する。

Stomaphis japonicus TAKAHASHI クヌギクチナガオアブラムシ

有翅形1頭、無翅形1頭、5. IX. 1997, 埼玉県比企郡嵐山町鎌形(塩山, *Lasius spathepus* クサアリモドキの巣周辺より), 筆者採集, 黒須詩子保管。

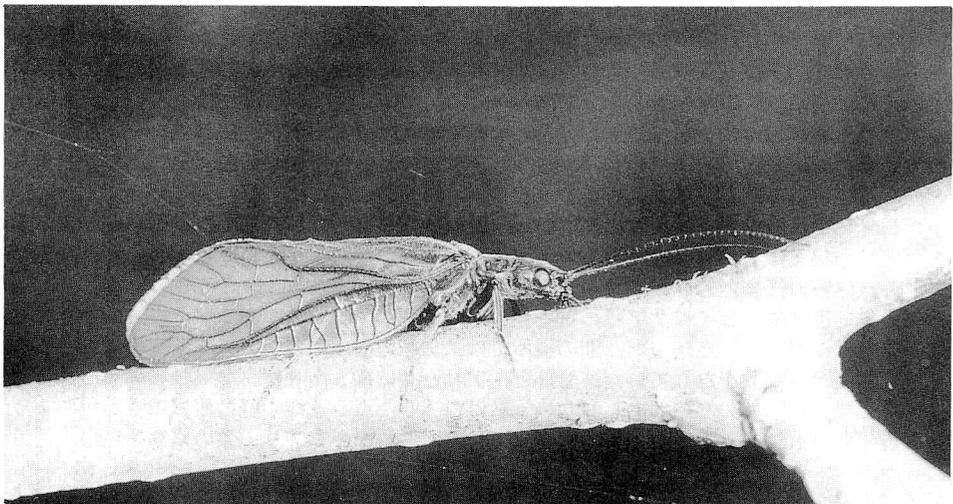
嵐山溪谷のセンブリについて

豊田 浩二

秩父山系を貫いて平野部へと流れ出す槻川は、嵐山町で都幾川と合流して緩やかな流れとなる。この合流点の少し上流に、景勝地として有名な“嵐山溪谷”がある。別名、武蔵嵐山（むさしらんざん）と呼ばれているこの溪谷は、片岩系の岩畳があつた長瀬を思わせるようで、丘陵地に接しながら山に分け入った溪谷と同じような環境が見られる。観光地とは言っても、目だつて人の侵入が見られる場所はバーベキュー場の河原とキャンプ場周辺だけである。その他の場所は良好な環境が保たれており、昆虫類も特異な種が多く生息している。

この嵐山溪谷にはセンブリが見られる。センブリが生息する場所は、岩畳の中でも湧水が流れる辺りで、灌木や草の葉上に静止している事が多い。個体数もさほど多くは無いようで、半日うろついても4、5匹を見かければ良いといった感じである。最盛期にはもう少し多いのであろうが、この生息地の下流では全く見かけないし、上流でも見たことは無い。そういった意味では、嵐山溪谷のセンブリは細々と生きる個体群のように思える。

牧林（1998）によれば、県内では *Sialis sibilica* MACLACHULAN センブリが荒川流域で確認されており、横瀬町から浦和市まで広範囲で見つかっている。またこれとは別に、*Sialis* sp. センブリの一種が小鹿野町から記録されているが、あるいは同じ種類である可能性もある。我が国には *Sialis* 属の種のほかに *Nipponosialis* 属の種が分布しているが、いずれにしてもセンブリの仲間は種の同定が非常に困難であり、正確な同定は雄交尾器による以外には不可能であろう。よって、嵐山町の個体群も雄交尾器による同定が必要であるが、いまだ実施していないのが現状である。ちなみに嵐山の個体は *Sialis* 属の一種であるので、あるいは県内で記録された種類と同様のものであるかもしれない。



クワの枝に静止するセンブリの一種（1997年5月下旬、嵐山町鎌形の嵐山溪谷にて筆者撮影）

参考文献

牧林 功, 1998. 埼玉県のアミメカゲロウ類（ヘビトンボ目, ラクダムシ目, アミメカゲロウ目）. 埼玉県昆虫誌 I, 埼玉昆虫談話会, pp.267-272.

（とよだこうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686）

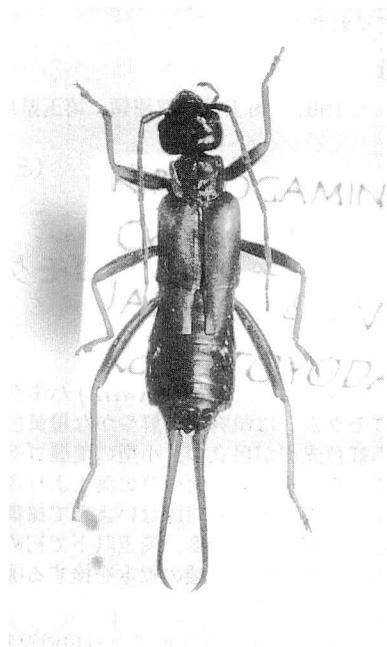
エゾハサミムシの記録

豊田 浩二

エゾハサミムシ *Eparchus yezoensis* (MATSUMURA et SHIRAKI) は雌雄共に細長いハサミを持ち、前翅の黄色紋が鮮やかなハサミムシである。森林の落葉下等に生息することが知られており、比較的めずらしい種のようなのである。

本種の埼玉県下における採集例は埼玉県昆虫誌 I の内田(1998)によれば、皆野町と城峰山でのわずか2例が知られているに過ぎない。他に寄居町金尾での採集例もあるようで、正確には3例であろうか。また内田氏の私信によれば、嵐山町での調査の際、千手堂地区の嵐山溪谷(槻川)で本種の写真を撮影されているとのことである。いずれにせよ、本種は県内においてわずかな記録しかない種である。分布域の解明のためにも積極的な調査が必要とされる。

筆者は県内各地でゴミムシ・ハネカクシ採集などの折に、落ち葉の下などからエゾハサミムシ数個体を採集している。このほかにも、採集に同行した新井志保氏によりいくつかの標本が得られているので、この機会にまとめて記録しておきたい。



大滝村霧藻ヶ峰産の♀

1 ♀, 18. VIII. 1995, 秩父市丸山(標高900m付近) ; 2 ♂♂, 19. VII. 1998, 東秩父村旧定峰峠(標高600m付近の自然林脇に通るU字溝) ; 1 ♀(図), 4. V. 1997, 大滝村霧藻ヶ峰(標高1,523m) いずれも筆者採集, 保管。

2 ♂♂ 2 ♀♀, 24. VII. 1999, 横瀬町大野峠(標高880m付近の雑木林落葉下) ; 1 ♂, 31. VII. 1999, 大滝村中津川溪谷大山淵(標高1,400m付近の自然林落葉下) いずれも新井志保氏採集, 保管。

末筆ながら、本種の県内における記録等についてご教示いただいた寄居町の内田正吉氏に、また記録の公表を快諾された東京農業大学昆虫学研究室の新井志保氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

内田正吉, 1998. 埼玉県のハサミムシ目. 埼玉県昆虫誌 I, 埼玉県昆虫談話会, pp.129-134.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

ハチモドキハナアブを嵐山町で採集

豊田 浩二

Monoceromyia pleuralis (COQUILLET) ハチモドキハナアブは、コナラやクヌギなどの樹液で採集されるめずらしい種である。県内では、南部敏明氏により採集された長瀨町での2オス個体が唯一の記録(玉木, 1997)のようである。筆者は嵐山町にて調査の際、本種を採集しているので報告する。

1♂, 10. VII. 1996, 嵐山町千手堂大平山; 1♂, 29. VII. 1999, 同町菅谷. いずれも筆者採集, 保管.

大平山での採集個体は、どのような状況で採ったのか覚えていない。その日はなんとなくハチやハエだけを採っていた事を記憶している。菅谷の個体は、筆者が案内役をしたことも昆虫教室の折り、菅谷館跡の雑木林にてクヌギの樹液に飛来していたのを採集したものである。擬態を説明するのに役かってくれた。

引用文献

玉木長寿, 1997. 埼玉県の変態類, 埼玉県昆虫誌 II, 埼玉昆虫談話会, pp.1 - 405.

(とよだ こうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

ハネグロツヤゴモクムシの県内における採集例

豊田 浩二

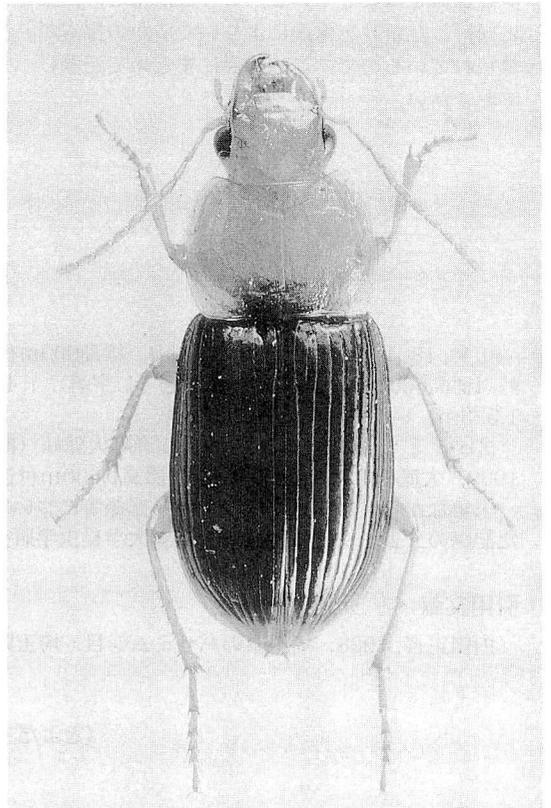
Trichotichnus lucidus (MORAWITZ) ハネグロツヤゴモクムシは頭胸部の鮮やかな橙黄色と上翅の虹色光沢が目立つ、小型の美麗ゴモクムシである。水際の地面や草の葉上より得られるが、あまり多い種ではないようで採集例も少ない。筆者はこの度、埼玉県下で初めて得られたと思われる本種の標本を検査する機会を得たので報告する。

1♀, 13. VI. 1999, 秩父郡荒川村川浦溪谷 標高700m付近, 新井志保採集, 筆者保管 (図)

溪谷沿いにある林道脇にて採集されたものである。川浦溪谷の林道は砂利敷きで一般車立ち入り禁止のため林道自体が荒れておらず、地表性甲虫類を採集するには良い場所である。林道脇の石起こしではこのほかにも様々な歩行虫類が得られているので、今後の調査次第では意外な種が見つかる可能性もある。

なお本種の好む環境については、筆者のこれまでの採集経験では水辺の水面上に垂れこんだ草をすくって得られており、沢や小さな小川の周辺に見られるようである。今後さらに記録を増やすためにも、水生昆虫類を採集される方は是非御注意されたい。

末筆ながら、貴重な標本を恵与下さった東京農業大学昆虫学研究室の新井志保氏に厚く御礼申し上げます。



(とよだこうじ 〒355-0221 比企郡嵐山町菅谷686)

飯能市多峰主山でツヤネクイハムシを採集

雛倉 正人

ツヤネクイハムシ *Donacia nitidior* (Nakane) は、埼玉県では記録の少ない種で、狭山湖以外では知られていないようである。筆者は飯能市多峰主山（とおのすやま）の廃田跡の湿地で、スゲ類の花についていた本種を得ているので報告する。生息地は非常に局所的であった。

4頭、埼玉県飯能市多峰主山、30. IV. 1999、雛倉正人採集・保管。

参考文献

吉越 肇ほか、1998. 埼玉県の鞘翅目（甲虫類）. 埼玉県昆虫誌 III, 埼玉昆虫談話会, 大宮 : 93-340.

(ひなくら まさと 〒112-0001 東京都文京区白山2-20-13 鯉田荘)

東京都心部でエゾカタビロオサムシを採集

雛倉 正人

エゾカタビロオサムシ *Campalita chinense* (Kirby) を東京都文京区内で採集した。都心部においては比較的珍しい事例と思われるので記録しておく。

1♀, 東京都文京区白山, 3. VIII. 1999, 雛倉正人採集・保管。

当地は東大植物園に面しており、仕事帰りに、街灯の下を這っていた個体を採集した。アオオサムシ *Carabus insulicola insulicola* Chaudoir はかなり生息しており、植物園内の側溝や付近の街灯でたまに見かけるが、文京区で生まれ育った筆者にとって、エゾカタビロオサムシを当地で見かけるのは初めてだった。しかし、環境から推して、持ち込まれたものではなく、まだ生息している可能性が高い。

(ひなくら まさと 〒112-0001 東京都文京区白山2-20-13 鯉田荘)

報文の訂正

松木 和雄・喜多 英人

『寄せ蛾記』92号に掲載された報文について、以下のとおり訂正する。

松木 和雄・喜多 英人: 埼玉県都幾川産ホンサナエ幼虫の背棘・側棘数の変異について。
寄せ蛾記, (92): 2729-2732.

◇報文1ページ目のp.2729(本誌のページ数は誤表記で、シールにより訂正されている)
下から9行目

「埼玉県東松山市嵐山町都幾川」とあるのは「埼玉県嵐山町都幾川」の誤り。

◇裏表紙の目次のタイトルでは、「都幾川村産」は「都幾川産」の誤り。

(まつき かずお 〒274-0822 船橋市飯山満町3-1575-14)

(きた ひでと 〒203-0033 東久留米市滝山6-2-15-308)

戸田市立郷土博物館第9回企画展「蝶と蛾の世界（市川和夫コレクション）」について

矢島 嘉和

去年の7月23日から8月30日まで開催していた戸田市立郷土博物館第9回企画展を紹介します。寄せ蛾記では特に大きく紹介していなかったのですが、8月15日に戸田市立郷土博物館に行った時の状況を写真で紹介します。尚写真撮影は、博物館の担当者に了解を得て、展示の状況を撮影するという事で許可を受けています。ドイツ箱内に収蔵されている標本等は撮影していません。



写真1. 企画展の案内



写真2. 企画展の看板



写真3. 企画展の展示状況(1)



写真4. 企画展の展示状況(2)



写真5. 市川和夫氏の経歴

茨城県つくば市でクロコノマチョウを採集

塘 久夫

茨城県つくば市でクロコノマチョウを採集したので報告する.

記 録 : クロコノマチョウ *Melanitis phedima* 1♂ (秋型)

採集日時 : 1999年10月18日 夕刻5時

採集場所 : 茨城県つくば市天久保追越沼

採集者 : 塘 研 標本は筆者保管

クロコノマチョウを見つけた場所は筑波大学構内の建物へと続く取り付け道路の階段壁面で、翅を閉じてコンクリート壁面に静止していた。採集者が手で摘んで採集した。周囲の環境は林や植え込みなど緑が多い。採集個体は完全体で、とても遠距離を飛んできたとは思えない新鮮な個体で、当地で発生した可能性が高い。

なお、この年は9月24日に台風18号が関東地方に接近し、終日強い南風が吹き荒れたが、採集日は台風接近から3週間以上経過しており、この台風によって運ばれてきた迷蝶とは考えにくい。

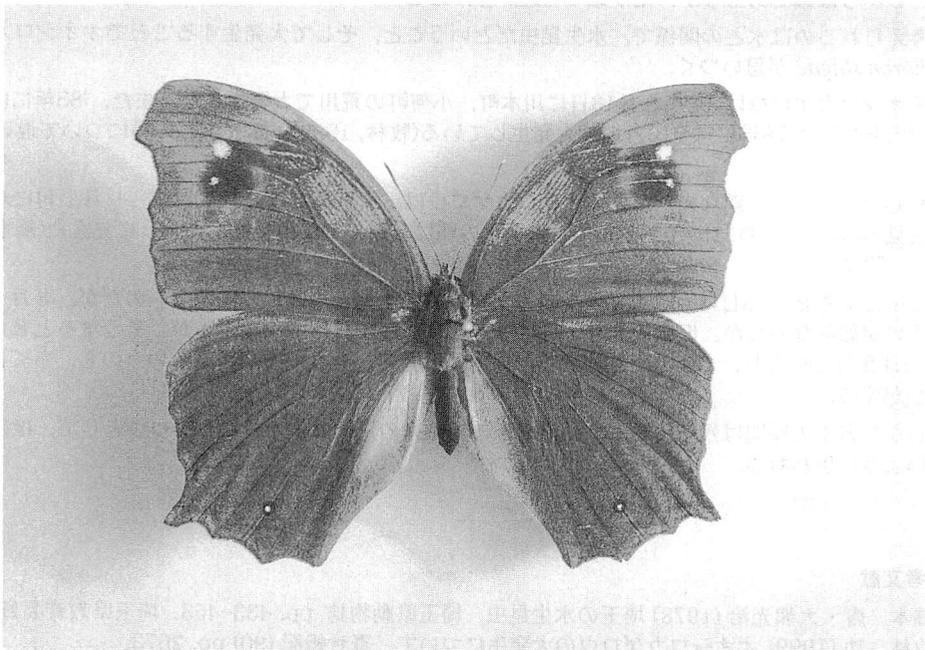


図. 採集されたクロコノマチョウ♂

見沼の『蝶の施餓鬼』について

牧林 功

見沼代用水東縁の伝承として、『蝶の施餓鬼』なつものがある。少し長いが『ふるさと美園』から全文を引用する。

むかし、見沼用水がうっそうとしていて、草に覆われていた頃のお話。

毎年、8月1日頃と23日頃の夜明け前、川面一面に「サ〜〜ッ」という音とともに、サヤエンドウの花ぐらいの大きさのうす白色がかかった蝶が、何万羽・何十万羽と川を遡って飛んできました。

やがて、日が昇るころ、カツキ死んで流されるという不思議な光景は、「蝶の施餓鬼」と呼ばれ、明治時代から昭和の戦後しばらくの間、毎年見られました。

このようすを見ていた大崎の吉田やえさんは、「それはもう幻想的で、誰も信じてはくれないでしょう」と話してくださいました。

護岸改修がなされた用水浴いのクモの巣に、あの蝶がついていることがあると聞きましたので、一度探してみたいかたがでしょうか。

さて、この文を読んでまず気がつくのは、これは蝶ではない、ということです。「川面一面に何万、何十万の数の蝶が遡って飛び、日が昇る頃、力尽きて水面に落ちて流される」ことは、蝶ではまずない。しからば蛾であろうか。だが蛾でも思い浮かばない。

考えられるのは水との関係で、水生昆虫だということ、そして大発生することでオオシロカゲロウ *Ephoron shigae* が思いつく。

オオシロカゲロウは'98年9月13日に川本町、小何町の荒川で大発生した。また、'85年には鴻巣市で大発生し、'78年には全国各地で大発生している(牧林, 1999)。まず、この種について違いなろう。

肝心なことは発生期なのだが、オオシロカゲロウは、埼玉県では8月下旬から9月上旬にかけて発生を見る(橋本・大熊, 1978)。そして大量羽化の朝は、川の上に霞が棚引くように見えた(橋本・大熊, 1978)という。

文中にある8月23日は、このオオシロカゲロウの発生期と一致して問題ないのだが、8月1日というのが如何なものか。旧暦の8月1日になれば、9月10日位で一致するが、そうなると8月23日が10月2日位になり、ちょっと遅すぎる。片方が旧暦で、もう一方が新暦というのも、ちぐはぐな感じがする。

しかし若干の疑問は残るにせよ、見沼の蝶の施餓鬼の正体はオオシロカゲロウとして、ほぼ間違いないように思われる。

参考文献

- 橋本 庸・大熊光治(1978)埼玉の水生昆虫。埼玉県動物誌 pp. 433-458。埼玉県教育委員会。
牧林 功(1999)オオシロカゲロウの大発生について。寄せ蛾記(90) pp. 2673。
無 名(1999)蝶の施餓鬼。ふるさと美園—美園公民館開館25周年記念誌—。p. 48。

ミヤマヒメジョウカイの学名について (訂正)

難倉 正人

ミヤマヒメジョウカイは、中根猛彦博士が、ヒメジョウカイ *Mikadocanthis japonica* Kiesenwetter の亜種として、1992年に記載したものである。高橋和弘氏は日本各地のヒメジョウカイ類を調査し、1996年にミヤマヒメジョウカイを独立種とし、1998年に *Mikadocanthis* を *Athemus* 属の亜属として位置づけた。本種の学名は、中根の原記載では *alpicola* であるが、高橋(1998)の扱いでは *alpicolus* になっており、筆者も後者の命名を引用した(難倉, 1999a, 1999b)。

結論をいうと、原則的に正しいのは前者の *alpicola* である。*alpicola* は、高い山に住む者の意で、名詞である。ここで、*Mikadocanthis* は女性、*Athemus* は男性であることに注意されたい。もし種名が形容詞ならば、所属の変更に伴い、例えば *alpina* → *alpinus* という語尾の変化がありうる。しかし名詞にはそうした変化はなく、これはいわゆる incorrect original spelling であると考えられる。実際、高橋(1999)では再び *alpicola* に訂正されている。

最近筆者は、埼玉県昆虫誌別巻の正誤表のチェックを依頼され、この誤った学名を引用してしまった(吉越肇ほか, 1999, p.14, 0.14)。筆者と高橋氏とはもはや数年以上にわたるつきあいであり、早期にこの点に気付いていれば、これは防げたはずで、この場を借りて本会の諸氏にお詫びしておく。したがって、これに収録されている埼玉県産昆虫リスト p.135, 0.26, 更に、最近出た神奈川県産の甲虫のリスト(平野, 1999, p.77, 0.6)等も、これに倣うと、*alpicolus* → *alpicola* と訂正されるべきものであろう。

但し、平嶋義宏博士の生物学名命名法辞典(1994)のp.101によると、接尾辞 *-cola* を *-colus* と変化させて形容詞化する場合も、現代の用法では見られるとのことである。また余談であるが、ミヤマヒメジョウカイの分布の中心はブナ帯であり、高山帯にはいない。しかし、学名の安定性の見地から、これを勝手に *monticola* などと変更することは認められないのももちろんである(アブラナ科を食い、バラ科にはつかないカブラハバチの種名は *rosae* である)。さらにこの辞典の p.112によると、動物命名規約では、*-ornis* や *-cola* に終わる属名は男性であるという。したがって、*Athemus alpicola* という表記は正しいが、*Mikadocanthis alpicola* はラテン文法上おかしい表現であることになる。また、*Mikadocanthis japonica* と *Athemus japonicus* が正当な表記で、*Mikadocanthis japonicus* はおかしい表現である。

筆者自身は、新種を書いたり、命名の変更処置をするような論文を書いたことはない、また、昨今では、地域の生物相や自然誌についての情報が、昆虫同好会誌だけでなく、自治体や環境コンサルタントなどが関与する出版物の中で、大量に流通している。正規の分類学や古典語文法の教育を受けていない者も、これらを通じて学名にふれる機会は大変増えている。我々は、命名規約のしくみや理念をよく理解し、時には識者の意見を聞き、学名の混乱を招かぬように、自戒をこめて注意するしかないだろう。

参考文献

- 難倉正人, 1999a. 南部フォッサマグナ地域とその周辺におけるミヤマヒメジョウカイの色彩地理変異. 神奈川虫報, (126): 1-12.
- 難倉正人, 1999b. 大滝村雁坂峠とその周辺の甲虫類(第1報). 寄せ蛾記, (92): 2733-2752.
- 平野幸彦, 1998. 神奈川県産甲虫類目録. 神奈川虫報特別号 No.2: 35-124.
- 平嶋義宏, 1994. 生物学名命名法辞典, 平凡社, 東京.
- 中根猛彦, 1992. 日本の雑甲虫覚え書 9. 北九州の昆虫, 39(2): 73-79, 1pl.
- 高橋和弘, 1996. 神奈川県産のジョウカイボン科の追捕について. 神奈川虫報, (113): 19-37.
- 高橋和弘, 1998. 日本産ジョウカイボン科目録. 神奈川虫報, (122): 29-48.
- 高橋和弘, 1999. 「日本産ジョウカイボン科目録」の訂正. 神奈川虫報, (127): 56.
- 渡辺千尚, 1992. 国際動物命名規約提要, 文一総合出版, 東京.
- 吉越肇ほか, 1999. 『埼玉県の鞘翅目(甲虫類)』への訂正と追加. 埼玉県昆虫誌別巻, 埼玉県昆虫談話会, 大宮: 11-19.

寄せ蛾記89号に関する訂正

豊田 浩二

1. 掲載種の誤同定に関する訂正

『埼玉県嵐山町における甲虫相の研究』寄せ蛾記89号において Coccinellidae テントウムシ科は37種を記録したが、この中に1種類誤同定があったので訂正する。

2622頁 テントウムシ亜科の4

誤: *C. quatuordecimpustulata* (LINNAEUS) ジュウシホシテントウ

正: *Oenopia hirayamai* (YUASA) ウスキホシテントウ (同亜科の5番)

つまり、ジュウシホシテントウとしたものは全てウスキホシテントウであり、4番を消して5番の種に記録だけを追加していただきたい。これに伴い、テントウムシ科の種数は36種に、2586頁の「4. 調査結果と考察」の1行目にある甲虫類925種は、924種に変更される。

松原 豊氏のご教示によればジュウシホシテントウは草地性の種であるとのことで、嵐山で得られたものがいずれも樹上での採集例であったことから、すぐに調べ直したところ誤同定であることが明らかになった。この種がもし採集されていたら、本来は県内初記録種であったようである。しかしながら、なぜか目録に初記録種の印は付いていない。不幸中の幸いであろうか。同じ目録に両種の種名が掲載されているのは、各標本の同定をした時期の相違によるもので、もちろん誤同定のもので先である。標本と原稿の付け合わせが間に合わず、初期の同定のもので混ざってしまった。安易な絵合わせ同定で起きる初歩的な間違いであり、恥ずかしい限りである。今後こうしたことが起きないように、出来るだけ気を付けたい。また、嵐山の目録に掲載された種の中には、未だに同定に疑問の残るものが数種類あり、順次解決して行かなければならない課題である。間違いであればその都度訂正させていただきたいと思う。なお、埼玉県昆虫誌の別巻、埼玉県産昆虫リストには、この種は掲載されていないので問題無い。

2. 学名等の文字に関する訂正

掲載種の学名等、文字に関する誤植があったので訂正する。かなりの箇所学名のスペルミスが見られるが、これは筆者がパソコンの『パ』の字も知らない頃に必死になって打ちまくった原稿を、締め切り等の関係でほとんど見なおさずにいたために起きたミスである。学生当時、卒論の締め切りに間に合わずにパニックした時の状況が見て取れて筆者自身は大変楽しいが、そう言う問題ではないほどに間違いが多い。ゴミムシ類に特に多いのは、「まさかゴミムシに限って」という筆者のおごりによるものであろう。情けない限りである。とにかく、記録してみて“間違いたら直す”という精神は大切である。読者の方々には大変なご迷惑をおかけしていることに深くお詫び申し上げる。以下に訂正箇所を示す。

2591頁 ハンミョウ科の3. コハンミョウ

誤: CHAEVROLAT → 正: CHAUDOIR

同頁 オサムシ亜科の5. クロナガオサムシ

誤: *procelus procelus* → 正: *procerulus procerulus*

2593頁 ナガゴミムシ亜科の2. トックリナガゴミムシ

誤: *haptodeides* → 正: *haptoderoides*

同頁 ナガゴミムシ亜科の6. ニッコウヒメナガゴミムシ (解説文)

誤: 寄せ蛾~~き~~ → 正: 寄せ蛾~~記~~

同頁 ナガゴミムシ亜科の9. アシミゾナガゴミムシ

誤: MOTSCHULSKY → 正: MORAWITZ

同頁 ナガゴミムシ亜科の15. アオグロヒラタゴミムシ

誤: *chalpodes lampros* → 正: *chalcopus*

- 2594頁 マルガタゴミムシ亜科の科名
誤: Zarbinae → 正: Zabrinae
- 同頁 マルガタゴミムシ亜科の2. マルガタゴミムシ
誤: DEJAN → 正: DEJEAN
- 同頁 マルガタゴミムシ亜科の3. ニセマルガタゴミムシ
誤: MOTSCHULSKY → 正: MORAWITZ
- 2596頁 ゴモクムシ亜科の34. ムネアカマメゴモクムシ
誤: MORAWITZ → 正: MORAWITZ
- 同頁 ゴモクムシ亜科の35. イツホシマメゴモクムシ
誤: (WIEDMANN) → 正: (WIEDEMANN)
- 2597頁 アオゴミムシ亜科の3. キベリアオゴミムシ
誤: C. bioculatus MOTSCHULSKY → 正: C. circumductus MORAWITZ
- 2603頁 チビシデムシ亜科の4. ホソムネコチビシデムシ (解説文)
誤: 寄せ蛾き → 正: 寄せ蛾記
- 同頁 ハネカクシ科の上の行を1行空ける.
- 2604頁 アリヅカムシ亜科の2. ヒゲカタアリヅカムシ
誤: rossicornis → 正: arasicornis
- 同頁 アリヅカムシ亜科の11
誤: チシمامクゲアリズカムシ → 正: チシمامクゲアリヅカムシ
- 同頁 アリヅカムシ亜科の12
誤: コヤマトヒゲブトアリズカムシ → 正: コヤマトヒゲブトアリヅカムシ
- 同頁 シリホソハネカクシ亜科の1. クロズシリホソハネカクシ
誤: Tachyprus → 正: Tachyporus
- 同頁 ヒゲブトハネカクシ亜科の上の行を1行空ける.
- 2605頁 セスジハネカクシ亜科の1. ユミセミゾハネカクシ
誤: seracatus → 正: sericatus
- 同頁 ハネカクシ亜科の5. ホソチャバネコガシラハネカクシ
誤: brunneicollis → 正: brunnicollis
- 2606頁 アリガタハネカクシ亜科の2. アオバアリガタハネカクシ
誤: SHARP → 正: (CURTIS)
- 同頁 アリガタハネカクシ亜科の4. チビトガリハネカクシ
誤: (WALLASTON) → 正: (WOLLASTON)
- 2607頁 クワガタムシ科の2. コクワガタ
誤: Macrodorcus → 正: Macrodorcas
- 2608頁 ダイコクコガネ亜科の1. マメダルマコガネ (解説文)
誤: 以外 → 正: 意外
- 2610頁 コフキコガネ亜科の12. カミヤピロウドコガネ (解説文)
誤: 以外 → 正: 意外
- 同頁 スジコガネ亜科の1. コイチャコガネ
誤: tenuaculatus → 正: tenuimaculatus
- 2611頁 ハナムグリ亜科の4. シロテンハナムグリ
誤: submarumorea → 正: submarmorea
- 同頁 ヒラタドROMシ科の3. マスダチビヒラタドROMシ (解説文)
誤: 得られた → 正: 記録された
- 2612頁 タمامシ亜科の3. クロタمامシ
誤: Buprestis haemorrhoidalis HERBST
→ 正: Buprestis haemorrhoidalis japonensis E. SAUNDERS

- 2614頁 コメツキ亜科の5. ヒゲナガコメツキ
誤: *Neotrichophorus linteatus* → 正: *Neotrichophorus junior junior*
- 2615頁 ジョウカイボン亜科の6. ウスチャジョウカイ
誤: *Athemus* → 正: *Athemellus*
- 2620頁 オオキノコムシ亜科の2. ルリオオキノコムシ
誤: *A. bedeli* HAROLD → 正: *A. sibiricus* REITTER
- 2624頁 ナガクチキムシ亜科の2. ピロウドホソナガクチキ
誤: *P.* → 正: *Phloeotrya*
- 2629頁 カミキリ亜科の4. ヒメスギカミキリ
誤: *Palaeocallidium* → 正: *Callidiellum*
- 2632頁 クビボソハムシ亜科の10. キイロクビナガハムシ
誤: *Liloceris* → 正: *Lilioceris*
- 同頁 ツツハムシ亜科の6. コヤツボシツツハムシ
誤: *C. instabilis* BALY → 正: *C. luridipennis* SUFFRIAN
- 2633頁 ハムシ亜科の5. ズグロキハムシ
誤: *japonica* → 正: *japonicus*
- 2635頁 ノミハムシ亜科の14. テントウノミハムシ
誤: *biplagiata* → 正: *biplagiatus*
- 同頁 ノミハムシ亜科の21. カタクリハムシ
誤: *punctastriata* → 正: *punctato striata*
- 同頁 ノミハムシ亜科の24. ガマズミトビハムシ
誤: *Zipanginia* → 正: *Zipangia*
- 2637頁 オトシブミ亜科の7. ケシルリオトシブミ
誤: *polita* → 正: *politus*
- 2641頁 ヒメゾウムシ亜科の6. ニセヒシガタヒメゾウムシ
誤: *Barinomorphus* → 正: *Barinomorphoides*
- 同頁 サルゾウムシ亜科の1
誤: マメサルゾウムシ → 正: マルメサルゾウムシ
- 2642頁 Ipinac ザイノキクイムシ亜科 (和名の追補)
- 同頁 Hylesininae カワノキクイムシ亜科 (和名の追補)
- 同頁 カワノキクイムシ亜科の1. ヒバノキクイムシ
誤: (HAPUIS) → 正: CHAPUIS
- 2645頁 図版2の21 (種名)
誤: ルイスデオキノコムシ → 正: ルイスデオキスイ
- 2646頁 表の右側
誤: コイケヒメハナノ12.ハミ → 正: コイケヒメハナノミ

末筆ながら、ジュウシホシテントウの記録についてご指摘くださり、分布についてご教示いただいた横浜市の松原 豊 氏に、訂正に際してご協力頂いた福岡市の藤本博文氏に厚く御礼申し上げます。

昆虫誌プラス (2)

埼玉昆虫談話会

当会は、1999年に、埼玉県産昆虫9,360種をリストした『埼玉県昆虫誌』別巻を刊行した。
 本報文は、別巻刊行後に明らかになった埼玉県初記録種を含む報文を中心に、学名・和名の変更、種の削除などを適宜まとめて紹介するものである。
 まとめ方や閲覧文献などの詳細については、本報文の連載初回である『寄せ蛾記』93号p.2803を参照されたい。

【埼玉県初記録種】

HOMOPTERA 同翅目

- ◆ 豊田 浩二 (2000) 寄せ蛾記 (94): 2838-2839

Aphididae アブラムシ科

Stomaphis japonicus TAKAHASHI クヌギクチナガオオアブラムシ

COLEOPTERA 鞘翅目

- ◆ 小田 博・南部 敏明 (2000) 埼玉動物研通信 (33): 10-12

Eucnemidae コメツキダマシ科

Dirhagus pectinicornis HISAMATSU フチトリコメツキダマシ

Cerambycidae カミキリムシ科

Eumecocera gleneoides (GRESSITT) シラホシキクスイカミキリ

Chrysomelidae ハムシ科

Cryptocephalus fulvus GOEZE ウスグロチビツツハムシ

- ◆ 豊田 浩二 (2000) 寄せ蛾記 (94): 2835-2837

Hydraenidae ダルマガムシ科

Ochthebius hasegawai NAKANE et MATSUI, 1986 ハセガワダルマガムシ

Ochthebius nakanei MATSUI, 1986 ナカネダルマガムシ

- ◆ JACH, M. A. and J. A. DIAZ (1999) *Jpn. J. syst. Ent.*, 5(2): 337-340.

Hydraenidae ダルマガムシ科

Hydraena yoshitomi JACH et DIAZ, 1999

※ 本誌p.2835-2837を参照のこと。

- ◆ 豊田 浩二 (2000) 寄せ蛾記 (94): 2842

Carabidae オサムシ科

Trichotichnus lucidus (MORAWITZ) ハネグロツヤゴモクムシ

HYMENOPTERA 膜翅目

- ◆ 南部 敏明 (2000) 埼玉動物研通信 (33): 1-9.

Ichneumonidae ヒメバチ科

Deuteroxorides orientalis (UCHIDA, 1928)

Podoschistus alpeensis (UCHIDA, 1928)

Mesostenus funebris (GRAVENHORST, 1829) コクロオナガトガリヒメバチ

Cratichneumon aspratilis TOWNES, MOMOI et TOWNES

Cratichneumon bifasciatus (UCHIDA, 1926) フタスジヒメバチ

- ◆ 南部 敏明 (2000) 埼玉動物研通信 (33): 16.

Ichneumonidae ヒメバチ科

Phobocampe uncinatus (GRAVENHORST, 1829)

Charops bicolor (SZEPLIGETI, 1906) ホウネンダワラチビアメバチ

Bethylidae アリガタバチ科

Eptris sp. ニオウアリガタバチ

Pompilidae ベッコウバチ科

Aporus japonicus YASUMATSU et TORIKATA ヒラカタベッコウ

DIPTERA 双翅目

- ◆ 松浦 誠・小池 賢治(1999) 中国昆虫 (13): 47-48.

Synphidae ハナアブ科

Volucella suzukii Matsumura スズキベッコウハナアブ

△ この報文は、玉木長寿氏のご教示による。

LEPIDOPTERA 鱗翅目 (蛾類)

- ◆ 神部 正博・築比地 秀夫・長畑 直和 (2000) 寄せ蛾記 (94): 2813-2829

Noctuidae ヤガ科

(3812) *Euplexia albovittata* Moore マエグロシラオビアカガネヨトウ

(3923) *Platysenta illecta* (Walker) オオホシミミヨトウ

(3965) *Lophoptera hayesi* Sugi ヤマトホソヤガ

(3980) *Nycteora dufayi* Sugi クロテンキノカワガ

(4265) *Anomis longipennis* Sugi ムラサキオオアカキリバ

(4286) *Hypocala violacea* Butler ヘリボシキシタクチバ

(4288) *Ischyja manlia* (Cramer) オオルリオビクチバ

(4470) *Hypena subcyanea* Butler アオアツバ

(4472) *Hypena lignealis* Walker オスグロホソアツバ

(---) *Hypena* sp. 2 ハナトガリアツバ

【埼玉県昆虫誌への訂正記事一覧】

COLEOPTERA 鞘翅目

- ◇ 難倉 正人 (2000) 寄せ蛾記 (94): 2849

ミヤマヒメジョウカイの学名について、別巻の訂正記事およびリストを訂正。

その他、編集上の訂正

- ◇ 別巻 p.209 下から15行目の次の種の命名年

Drosophilidae ショウジョウバエ科

(誤) *Amiota (Phortica) magna* OKADA, 196 オオマダラメマトイ

(正) *Amiota (Phortica) magna* OKADA, 1966 オオマダラメマトイ

- ◇ 別巻 p.271 の都道府県別昆虫目録の目別種数および世界と日本の既知種概数について、日本産の概数のうち

バッタ目 25(誤) → (正) 225

ハジラミ目 50(誤) → (正) 150

アザミウマ目 00(誤) → (正) 200

表 埼玉県産昆虫 目ごとの科・種数 最新情報

目 名	埼玉県昆虫誌 別巻 (1999)		前回までの 変更の合計		今回まとめ た変更の計		最新の科数 と種数	
	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数
COLLEMBOLA	トビムシ目	9科 38種					9科 38種	
PROTURA	カマシムシ目	4科 26種					4科 26種	
DIPLURA	コムシ目	3科 4種					3科 4種	
MICROCORYPHIA	イシノミ目	1科 1種					1科 1種	
THYSANURA	シミ目	1科 1種					1科 1種	
EPHEMEROPTERA	カゲロウ目	10科 72種					10科 72種	
ODONATA	トンボ目	11科 90種					11科 90種	
PLECOPTERA	カワゲラ目	9科 51種					9科 51種	
BLATTARIA	ゴキブリ目	2科 4種					2科 4種	
MANTODEA	カマキリ目	1科 5種					1科 5種	
ISOPTERA	シロアリ目	1科 1種					1科 1種	
ORTHOPTERA	直翅目	12科 121種		+1種			12科 122種	
PHASMIDA	ナナフシ目	1科 5種					1科 5種	
DERMAPTERA	ハサミムシ目	4科 13種					4科 13種	
GRYLLOBLATTODEA	カマシムシ目	1科 4種					1科 4種	
PSOCOPTERA	チャテムシ目	1科 1種					1科 1種	
MALLOPHAGA	ハジラミ目	1科 1種					1科 1種	
ANOPLURA	シラミ目	5科 10種					5科 10種	
THYSANOPTERA	アサミマ目	2科 13種					2科 13種	
HETEROPTERA	異翅目	38科 362種					38科 362種	
HOMOPTERA	同翅目	36科 619種		+1種		+1種	36科 621種	
AUCHENORRHYNCHA	顎吻垂目	(17科367種)		(+1種)			(17科368種)	
STENORRHYNCHA	腹吻垂目	(19科252種)				(+1種)	(19科253種)	
MEGALOPTERA	ヒトホ目	2科 5種					2科 5種	
RAPHIDIOPTERA	ウカシ目	2科 2種					2科 2種	
NEUROPTERA	アミカク目	10科 46種		+3種			10科 49種	
COLEOPTERA	鞘翅目	107科 2826種	+1科	+35種		+7種	108科 2868種	
STREPSIPTERA	シシ目	3科 13種					3科 13種	
HYMENOPTERA	膜翅目	51科 1069種	+1科	+41種		+9種	52科 1119種	
MECOPTERA	シアケ目	2科 18種		+1種			2科 19種	
SIPHONAPTERA	ノミ目	8科 30種					8科 30種	
DIPTERA	双翅目	87科 1490種		+1種		+1種	87科 1492種	
TRICOPTERA	トビケラ目	19科 83種					19科 83種	
LEPIDOPTERA	鱗翅目	57科 2336種				+10種	57科 2346種	
	蝶類	(5科 135種)					(5科 135種)	
	蛾類	(52科2201種)				(+10種)	(52科2211種)	
		32目 501科 9,360種	+2科	+83種		+28種	503科 9,471種	
		(埼玉県昆虫誌 別巻刊行時)						(本誌 刊行時)

寄せ蛾記 94号 目次

神部 正博・築比地 秀夫・長畑 直和：10月の両神山で 得た偶産性ヤガ科蛾類とその背景	2813-2829
喜多 英人：1998年 埼玉県でのトンボ生態記録	2830-2834
豊田 浩二：埼玉県のダルマガムシ類について	2835-2837
豊田 浩二：クサアリ類とクヌギクチナガオオアブラムシ	2838-2839
豊田 浩二：嵐山溪谷のセンブリについて	2840
豊田 浩二：エゾハサミムシの記録	2841
豊田 浩二：ハチモドキハナアブを嵐山町で採集	2842
豊田 浩二：ハネグロツヤゴモクムシの県内における採集例	2842
雛倉 正人：飯能市多峰主山でツヤネクイハムシを採集	2843
雛倉 正人：東京都心部でエゾカタビロオサムシを採集	2843
松木 和雄・喜多 英人：報文の訂正	2843
矢島 嘉和：戸田市立郷土博物館第9回企画展「蝶と蛾の 世界（市川和夫コレクション）」について	2844-2846
塘 久 夫：茨城県つくば市でクロコノマチョウを採集	2847
牧 林 功：見沼の『蝶の施餓鬼』について	2848
雛倉 正人：ミヤマヒメジョウカイの学名について（訂正）	2849
豊田 浩二：寄せ蛾記89号に関する訂正	2850-2852
〈本の紹介〉原 聖樹 著 「作物に魅せられたチョウは害虫？」（牧林功）	2853
埼玉昆虫談話会：昆虫誌プラス（2）	2854-2856
会 報	2853

[埼玉昆虫談話会 2000年2月29日発行 44pp.]